

栄悟寺 IN 栄悟部落

——中国甘南藏族自治州の宗教と社会——

三木友里*

〈序〉

大学で中国文化史を教えていると学生達がチベットの文化に非常に興味を示し、頻繁に質問が寄せられた。学生の質問に答えるため、チベット関連の書籍を読み、研究しているうちに、その世界に私自身が深く入り込んでしまった。

今年（1998年）5月4日に北京大学創立100周年記念式典に招かれ、その際に北京大学のお世話で北京にあるチベット佛教の最高学府、中国藏文語系高級佛学院で研究されている活佛丹木切加措¹⁾氏らに拝謁する機会に恵まれ、これがきっかけで1998年7月20日から8月1日までの間、甘粛省甘南藏族自治州唐尕昂郷にある栄悟寺を訪れ、調査研究することになった。

調査研究を開始するにあたって資料を探したが、チベット及びこの甘粛省について出版されている書籍は宗教に関するもの以外資料らしい資料もなく、現地で見聞きして確認するしかなかった。

現地は、同じ中国国内であるにも拘らずチベット語が主流であるため、極少ない一部の人以上北京語が話せず、非常に閉鎖的な所で、独特の生活文化を保っており、なかなか外部には民族の本当のことを教えたがらないようであった。

しかし、今回の調査研究が順調に進み、様々な地位の方に会い、お話を伺うことができたのは、いろいろな世話をしてくれた活佛達、郷政府の方々のおかげである。ここで調べた結果、今まで私自身が理解したつもりのチベット社会と現実のチベット社会とは、大分開きがあるように感じられた。活佛達も、外部の人（他地域の中国人や外国人）が、あまり客観的に正しく報道していないと感じており、様々な側面から協力することで、著者を通し世間の人々にチベット文化を理解してもらえようと強く願っているようであった。

今回の調査研究は、私自身が無学であり、調査期間も約2週間と短く、捕えきれしていない部分もあるが、専門家、諸先生方のお叱りを覚悟で発表する。先生方のご叱正、ご批判を賜ることができるよう願う次第である。

また今回、栄悟寺と栄悟部落の関係を通して、甘南州の寺院と人民の関係を考察しているが、時間と能力に限りがあったため、これを皮切りに今後も機会を見つけ、研究を続けていきたいと考えている。

一、〈チベット〉

所謂“チベット”という言葉で話題になる場所とは、中国の「チベット自治区」である。しかしチベット族は中国だけでなく、インド、ネパール等周辺諸国にも多く、中国国内のチベット族人口の総数は460万人であるが、そのうちチベット自治区内の人口は240万人である。あとの220万人は自治区以外のチベット族であり、チベット族の文化圏はもっと広域に渡っているはずである。その点に触れた文献、新聞記事など余り目にした事がない。

私知っている範囲では、台湾で出版されている中国四川大学の冉栄光教授の著した『中国藏傳佛教史』²⁾がチベット自治区以外のチベット族について紹介している位である。

一般に“チベット”という言葉で連想するのは、“ラサ”を中心とした“中華人民共和国チベット自治区”のことと思われる。しかし実際にチベット民族が居住している地域は、所謂チベット文化圏としての“チベット自治区”のみならず、東北は青海省、甘肅省、東は四川省、南はミャンマー、インド、ネパール、西はインドのカシミール地方、北は新疆ウイグル自治区までと広範囲にわたっている。

中国におけるチベット文化圏は、自治州、自治県という行政区画単位で表され、以下の通りである。なお中国語では、チベットのことを〈西藏³⁾〉、チベット族のことを〈藏族〉と表記する。

- 西藏自治区⁴⁾
- 青海省—海北藏族自治州、^{ジエグランド}玉树藏族自治州、海西蒙古族藏族自治州、海南藏族自治州、^{ゴロク}黄南藏族自治州、果洛藏族自治州
- 甘肅省—甘南藏族自治州、天祝藏族自治州
- 四川省—^{アバ}阿壩藏族羌族自治州、^{カンゼ}甘孜藏族自治州
- 雲南省—^{デチエン}迪慶藏族自治州

チベット族は、中国の歴史に^{テイ キョウ}氏、羌、党項・吐蕃などと呼ばれて古くから知られていたが、チベット本国と中国とが直接交渉を持つようになったのは隋唐の頃からのようである。隋唐の際に王位にあった^{ソツエンガムボ}松贊干布⁵⁾は、^{チベット}大西藏帝国の建設を企画し、東は中国に遠征して朝野を震駭させ、南は雪山を超えてネパールの諸王を戦慄させたが、凶らずも佛教文化の燦然とした輝きに驚き、ついに侵略の野望を捨てて文化の吸収に努力を払うに至ったと言われている。中国では、唐代(618~907)の太宗が文成公主を^{チベット}贊普(君王)に嫁がせたのをはじめ、宋代(960~1279)にも、西辺の事無きを計った。元代(1271~1368)にはその勢力下にあったが、明代(1368~1644)はチベットに野心を懐きながら為す所無くして終りを告げた。

清代(1616~1912)に至ってチベットは未曾有の圧迫を蒙り、遂に清朝の属領となった。清代の末、ロシア、英国の勢力が扶植するようになり、チベットは完全に中国の羈絆を脱すべく画策し、袁世凱の征伐を蒙ったが失敗に帰したため、イギリスの保護の下に独立の名を得るに至った。しかし、第二次世界大戦後イギリス勢力の後退により、現在では中華人民共和国の中に含まれている。

但し、近代、国民党政府の中華民国初頭、川辺特別区域(民国13(1924)年西康省とな

る)が設けられるまでは、西康省の西側半分もまたチベットの範囲であった。

中国で西藏という字を用いたのは清朝の領有後らしく、チベット本部の二大州である衛・藏の藏の字をとり、中国の西にあることから西藏と名づけたと言われている。故に日本でチベットと読むことの語源は英漢混同の変則呼称といえる。Tibetの漢音訳は、唐代には“吐蕃⁶⁾”、元時代には“^{トボトウオ}図伯特⁷⁾”、“^{トウボトウ}土伯特”、“^{タンクウツウ}唐古特”等と記されていた。

中国佛教文化研究所が1990年12月に出版した《法尊法師⁸⁾佛学論文集》の《閱評藏蜜答問隨筆》で述べられているが、漢族(中国人)が称する“西藏”の語源は、“衛”“藏”“康”の三文字の訳音字により表される。“衛⁹⁾”は「中」、^{ツァン}“藏¹⁰⁾”は「浄」、^{カム}“康¹¹⁾”は「境界」の意味を表す。チベットを大別すると、中央チベットの衛・藏、東チベットの康¹²⁾(^{カムバ}康巴)、東北チベットの^{アムド}安多¹³⁾の三つに分けられる。

“衛”と“藏”は、現在のチベット自治区一帯と青海省の一部を指しており、それぞれ“前藏”“後藏”と呼ばれる。

“衛”すなわち前藏は、中心を意味する通り、中心都市“^{ラサ}拉薩¹⁴⁾”一帯を指し、この地は^{クライ・ラマ}達賴喇嘛¹⁵⁾の管轄下にある。

“藏”すなわち後藏とは、浄の意味するところの聖地カイルス山(^{カン・リンポチエ}岡仁波齊¹⁶⁾峰)の麓にある聖湖マナサロワール湖(^{マバム・ユムツォ}瑪旁雍錯¹⁷⁾)より発する大河、^{ヤルン・ツァンボ河}雅魯藏布江¹⁸⁾からその名を取っている。

前藏との境界線は、^{シガツェ}日喀則から^{タングラ}“唐古拉山脈¹⁹⁾”の頂を二分している。この西側が後藏となる。チベット佛教の世界では^{バンチエン・ラマ}班禪喇嘛²⁰⁾の管理下である。ちなみにチベット語で言うカン・リンポチエとは「尊い雪山」、マバム・ユムツォとは「征服されない湖」(マハトマ・ガンジーの遺灰はここに撒かれた)という意味を持つ。カイルスとかマナサロワールとはインドでの呼称である。

“康”には、境界を表す広い土地という意味がある。原則として今日のチベット昌都地区、青海省玉樹、果洛藏族自治州、雲南省迪慶藏族自治州、四川省甘孜藏族自治州、甘孜州に隣接する部分の阿壩藏族羌族自治州市の地域及びミャンマー北部、インドまでの一帯を指す。現在では甘肅省のチベット族区全て、青海省の大部分、四川省甘孜州²¹⁾以北のチベット藏族区を含めた総称となっている。現在のチベット自治区は衛・藏と康の一部分だけである。

“安多”については、王雲峰が著した《活佛的世界》の中で拉卜楞寺の貢唐倉6世・丹貝旺旭大師が指摘しているが、「西康(現在の四川省甘孜藏族自治州)にある^{アチサル}阿欽桑熱²²⁾(チベット語で大銅山の意)から青海省の^{ドラルム}多拉熱牧²³⁾(地方名)の間に生活するチベット族」のことをアムドと言っていた。

また貢唐倉大師²⁴⁾によれば、唐代(618~907)にチベットのことを“吐蕃”と呼んだことについて、その語源は二種類あるという。ひとつはインドでは過去にチベットのことを^{トバンジヤ}“吐蕃²⁵⁾”と言い、“雪のある地、寒冷の地”を意味していた。チベット族はこの言葉を用いて、自らの居住地域を“大蕃²⁶⁾”と言った。しかし唐王朝がこの世には一つの“大唐”しかないと主張し、チベットのことを“吐蕃”と呼んだ。“吐”とは「小さい」という意味である。明代(1368~1644)に至ってからチベットのことを^{ウスツァン}“烏斯藏²⁷⁾”と呼んだ。“烏斯”とは前藏を指し、“藏”とは後藏を指す。

各チベット族自治区域の成立時期と1953年時の民族構成

自治体名	成立時期	総人口	藏族人口	藏族(%)	漢族人口	漢族(%)
西 藏 自 治 区	1965.9	1,273,969	1,273,969	100.0	0	0.0
果 洛 藏 族 自 治 州	1954.1	100,102	100,102	99.8	240	0.2
玉 樹 藏 族 自 治 州	1951.12	126,383	125,309	99.2	1,015	0.8
黄 南 藏 族 自 治 州	1953.12	69,086	61,398	88.9	3,258	4.7
海 西 蒙 古 族 藏 族 自 治 州	1954.1	20,585	7,999	38.9	2,718	13.2
海 南 藏 族 自 治 州	1953.12	115,721	79,438	68.6	29,175	25.2
海 北 藏 族 自 治 州	1953.12	73,023	24,028	32.9	25,895	35.5
甘 南 藏 族 自 治 州	1953.10	300,494	158,487	52.7	117,200	39.0
天 祝 藏 族 自 治 県	1950.5	58,731	19,972	34.0	38,096	64.9
甘 孜 藏 族 自 治 州	1950.11	503,892	420,314	83.4	76,070	15.1
阿 壩 藏 族 羌 族 自 治 州	1953.1	392,707	230,500	58.7	118,821	30.3
木 里 藏 族 自 治 県	1953.2	45,472	24,393	53.6	7,667	16.9
迪 慶 藏 族 自 治 州	1957.9	158,683	64,611	40.7	27,878	17.6

(1953年第1次全中国人口調査の資料より)

中国内のチベット族人口地理分布表

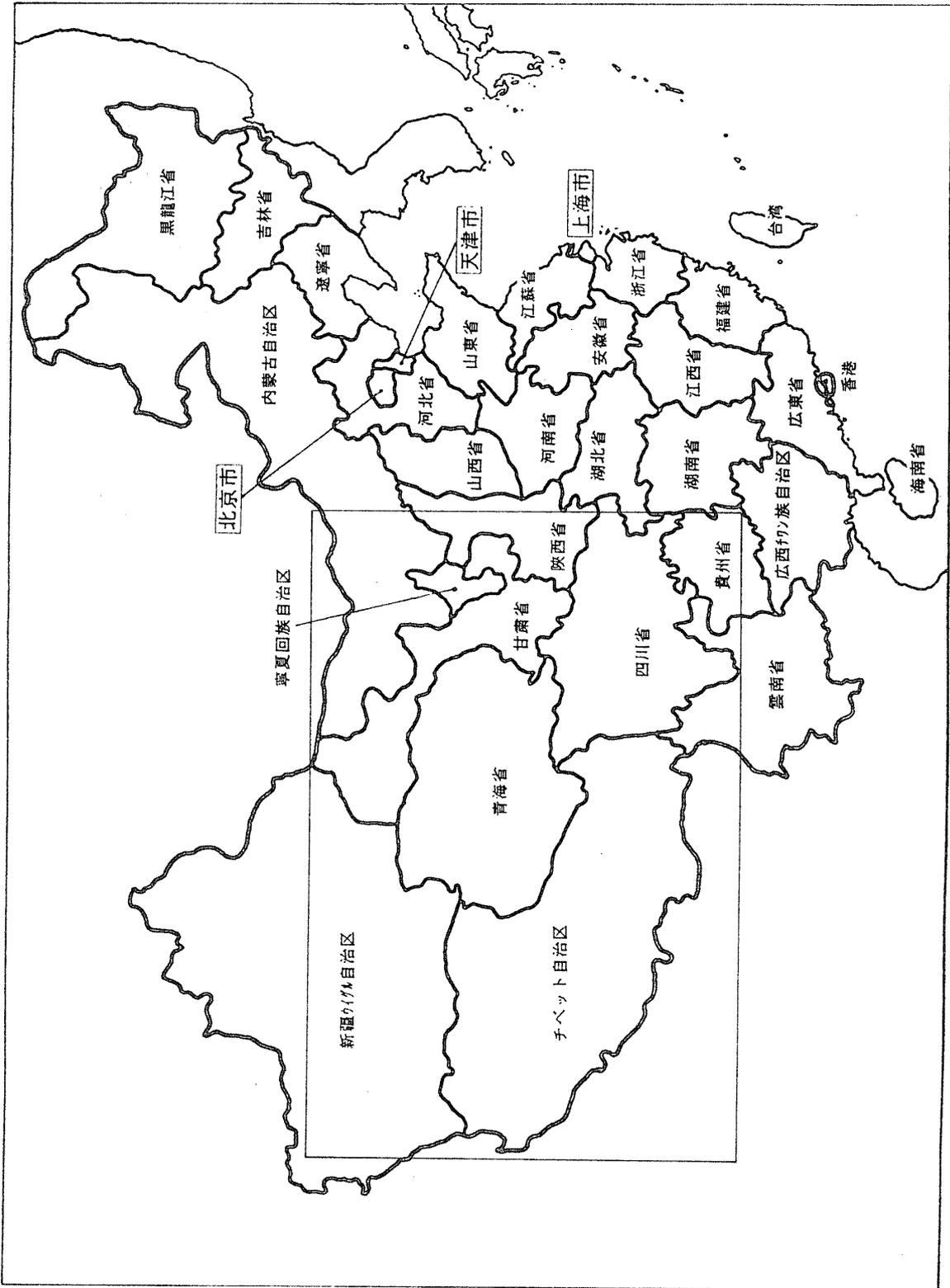
① 1982年人口調査

省区	人口	%	省区	人口	省区	人口	省区	人口	省区	人口
西 藏	1,764,600	45.8	新 疆	1,967	山 東	173	湖 北	83	浙 江	35
四 川	921,984	24.0	陝 西	1,120	広 西	149	江 蘇	82	天 津	30
青 海	753,897	19.6	北 京	820	河 北	127	山 西	75	吉 林	18
甘 肅	304,573	7.9	河 南	521	安 徽	105	遼 寧	67	24省区	6,896
雲 南	95,925	2.5	内 蒙 古	504	上 海	104	黒 竜 江	55		
以上合計	3,840,979	99.8	広 東	388	湖 南	95	寧 夏	47		
全 国	3,847,875	100.0	貴 州	205	福 建	87	江 西	39		

② 1990年人口調査

省区	人口	%	省区	人口	省区	人口	省区	人口	省区	人口
西 藏	2,096,718	45.6	新 疆	2,235	山 東	932	湖 北	760	浙 江	393
四 川	1,087,758	23.7	陝 西	1,319	広 西	211	江 蘇	866	天 津	505
青 海	912,160	19.9	北 京	1,329	河 北	995	山 西	474	吉 林	143
甘 肅	367,006	8.0	河 南	1,606	安 徽	558	遼 寧	625	海 南	101
雲 南	111,335	2.4	内 蒙 古	807	上 海	637	黒 竜 江	186	25省区	18,095
以上合計	4,574,977	99.6	広 東	1,307	湖 南	552	寧 夏	198		
全 国	4,593,072	100.0	貴 州	677	福 建	282	江 西	397		

(①「中国人口年鑑」編集部資料 ②国務院人口調査弁公室資料)





言語（チベット語）は、シナーチベット語族チベット-ビルマ語派に属しており、チベットのみにならず、ブータン、シッキム、ネパール、カシミール北東部などで話される。

中国のチベット文化圏では、基本的に衛藏、康、安多の3地域の方言に分かれている。第一は、チベット自治区の大部分で使われている衛藏の方言。第二は、チベット自治区の那曲、日喀則、林芝と昌都地区、四川省甘孜藏族自治州、雲南省迪慶藏族自治州及び青海省玉樹藏族自治州等の地域で使われている康の方言。第三は、チベット自治区の一部、青海省、甘肅省及び四川省阿壩藏族羌族自治州で使われている安多の方言である。

衛藏と安多の方言は明らかに違いが顕著であり、衛藏と康の方言が比較的接近している。但し各方言が全く異なるものではないので、ある程度は民族間の意思の疎通が可能である。

二、藏傳佛教

“藏傳佛教²⁸⁾”とは、中国語で「チベット佛教」のことであるが、この言葉自体があまり耳慣れないのではないのだろうか。“ラマ教”“ラマ僧”と云えば分かる方のほうが多いと思われる。

そもそも“ラマ”とはチベット語で、無上者、最上者という意味であり、高識有徳の僧に対する尊称であったのが、一般の僧をも称するようになった言葉である。ラマ教、ラマ僧、すなわち英語で“Lamaism”とも称しているものは、外部の者が“ラマ”が信奉している教、その“ラマ”の教の僧侶という使い方で言い始めた名称であって、ラマという経典が存在するわけでない。拉卜楞寺活佛扎阿班志達俄堅成多吉師²⁹⁾からも指摘を受けたが、チベット族自身は、けっして“ラマ教”とか“ラマ僧”とは言わないのである。

チベット佛教に関して、ラマという言葉を使い始めたのは、どうやら清朝政府がチベットを調査したときからのようであり、中華民国の時代にも調査に人員を派遣しているが、その後、チベット佛教を指す世界中の共通語となってしまっている。

当時の学術論文には、「喇嘛教」、「喇嘛教の起源」、「喇嘛教の珠数」、「西藏喇嘛教儀式与法器」など“喇嘛（ラマ）教”という言葉が頻繁に使われている。

現代になり“西藏密教”、最近では“チベット佛教”という言葉が使われるようになったが、ほとんどの辞書で、“チベット佛教”と引いても出てこない。やはり、“喇嘛（ラマ）教”なのである。

チベット佛教は大乗佛教³⁰⁾系に属し、その信仰はモンゴル、ネパール、ブータン、インド・ラダック地方など広域に根付いている。

佛教が伝来する前、チベットには“ボン教³¹⁾”と呼ばれる土着的民族宗教が広まっていた。ボン教は、万物には全て霊が宿ると考え、呪術的要素が強く、自然現象への民間信仰、祖先崇拜の民族宗教でもあった。伝説では、紀元前5世紀頃チベットの初代国王の時代にはボン教が定着しており、歴代の国王はみなその信者であったという。ボン教の言伝えによると釈迦入滅から418年目（今から2000年前）、チベットの初代国王となるニャティツェンポは、天と地を結ぶ「天繩」を用いて高国の雪嶺に突如降臨し、地元の民はこの王を奉迎して自ら^{ツェンツェンガムボ}の王にしたと言われる。ボン教の国王はその後、33代国王松贊干布の時代まで約千年にわ

たって君臨した。

7世紀、ソツェンガムポ王が初めてチベット全土の部落を統一し、吐蕃王朝を開いたことが知られているが、チベットが強大となったことで隣国の中国（唐）とネパールが友好の印として嫁がせた2人の王妃、文成公主とティツンによって佛教がもたらされたと言われる。

その後、佛教はボン教によって弾圧された時期もあったが、8世紀の赤松徳贊³²⁾の時代になると、本格的に佛教が普及し始めた。ティソン王はネパールからインド後期の大乘佛教と密教に精通した高僧寂護大師^{シヤーンタクシタ}を招き、大寺院建設に着手した。王は更に蓮華生^{サムイェ}³³⁾を招聘し、地鎮式を執行させ、779年、チベット最初の国立佛教寺院にあたる桑耶寺が創建された。桑耶寺では寂護大師を導師にチベット族6人に授戒が行われ、僧伽^{サンガ}（佛教教団）を形成する一方、サンスクリット語経典をチベット語に逐語訳する翻訳事業の拠点となり、佛教の普及活動が着々と進められていった。

ティソン王死後、蓮華生はその後の木赤贊普^{ムニツェンポ}³⁴⁾王の政治を助け、法律の制定、佛教学の伝授、顕教・密教の両方を備えた佛教、いわゆるチベット佛教の創建に貢献した。

9世紀、赤熱巴堅^{チルバチエン}³⁵⁾王は、ボン教の活動に制限を設け、佛教の繁栄を促したため、初期チベット佛教は版図を広げ、大いなる発展を遂げる。しかし841年、その兄弟でボン教徒の朗達瑪^{ランダルマ}³⁶⁾が王になると廃佛政策を取り始める。842年、朗達瑪王は暗殺されるが、廃佛政策は続き（842～846年）、佛教は王室の保護を失い、受難の時代を迎える。その後の100年間、チベットは群雄割拠の時代を迎えた。

朗達瑪の廃佛政策の際、僧侶達は康^{カム}一帯に逃れ、佛教は蓮華生を祖とする在家行者等によって伝えられ命脈を保ち、復活の時を待った。これはその後11世紀以降に伝来した新訳密教と区別され、古密教（古派；寧瑪派^{ニンマ}³⁷⁾）と呼ばれる。

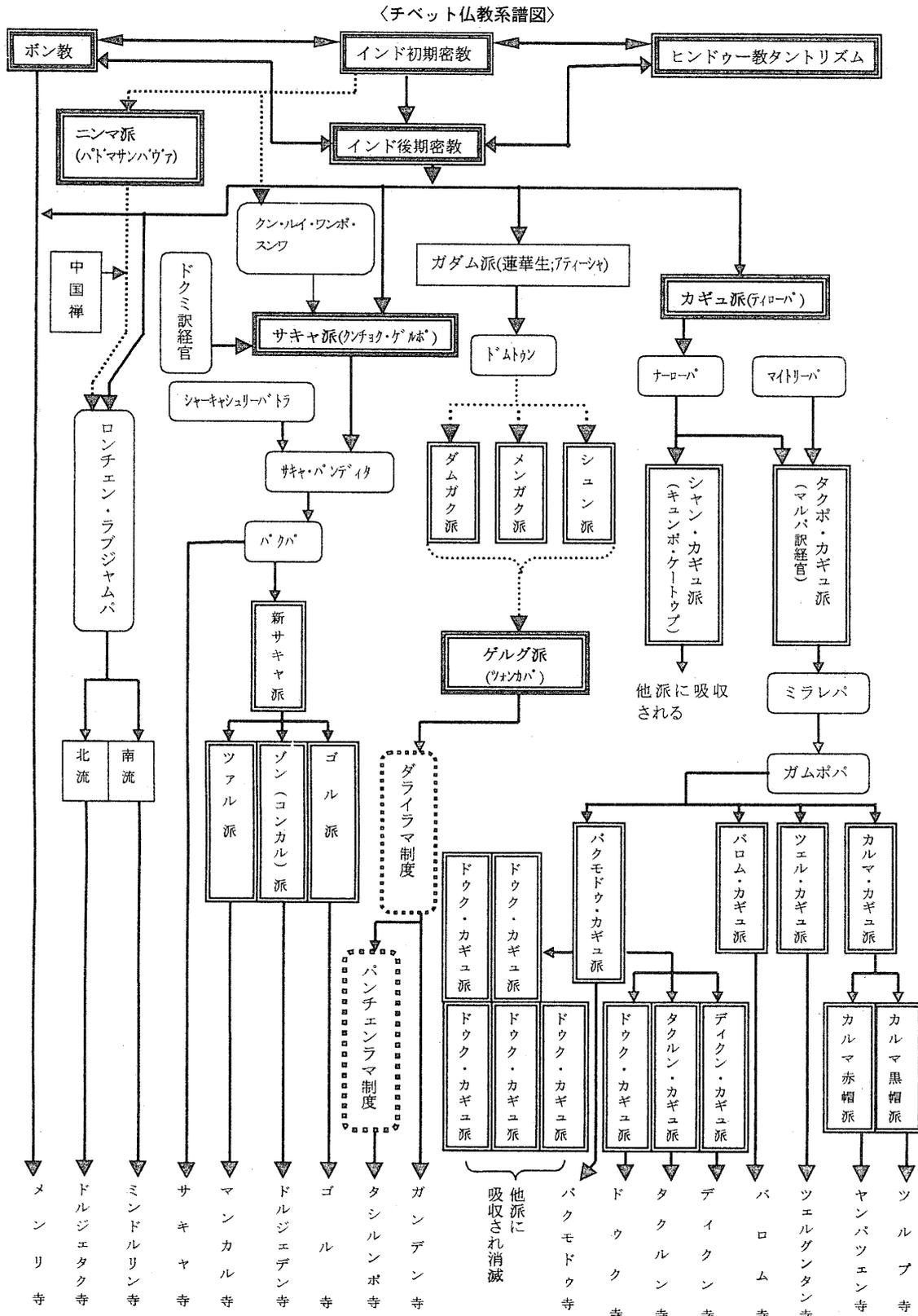
朗達瑪の後裔の吉徳尼瑪袞が、10世紀前半の奴隷と平民の大蜂起のさなかに阿里^{アリー}³⁸⁾に逃げ、その子の徳祖袞が今の札達県札布讓^{ツァンダ ツァフラン}一帯に古格王国を打ち建てた。11世紀、佛教はこの古格王国を発端に再び甦り、チベット全土に広まった。

1042年、インド後期佛教の総本山ヴィクラマシーラ大寺院の大学匠阿底峽^{アティンヤ}³⁹⁾が招かれ、未整理の状態にあったタントラ密教の方向性を是正して体系化し、チベット佛教の基盤を築いた。阿底峽の影響は各方面に及び、弟子仲敦巴^{ドムトワンバ}⁴⁰⁾は、阿底峽の「菩提道燈論」の理論を基礎として1056年に迦當派^{ガダム}⁴¹⁾を創立する。後に宗喀巴^{ツォンカバ}⁴²⁾が阿底峽の教学を基礎とし新迦當派ともいえる格魯派^{ゲルグ}⁴³⁾（1409年）を創始することになる。そして、12世紀前半までにはチベット佛教の主要宗派、薩迦派^{サキヤ}⁴⁴⁾（1073年）、噶舉派^{カギョ}⁴⁵⁾（1121年）が誕生した。

《寧瑪派》開祖＝蓮華生 本山＝敏珠林寺（南流）、多吉扎寺^{ドルジエタク}

ニンマとは“古派”を意味し、8世紀に蓮華生が築いたチベット初期佛教の流れを継承する。紅い帽子を被ることから紅帽派とも言われる。

ボン教の影響が濃く、他の宗派がインド後期大乘佛教系の新訳密教を聖典として拡張させていく中、古密教に依拠した寧瑪派は不純な要素をもつ非伝統的佛教であると批判を受けるようになった。14世紀の隆欽繞降巴^{ロンチエン・ラブジャムバ}は新興宗派の批判に対抗すべく、寧瑪派究極の奥義である「大究竟」の教えを初めて文字に記し、教義を整えた。「大究竟」は三部（心部・界部・秘訣部）に分けられるが、森羅万象は本来的に解脱した「心性」と説く。



《薩迦派》開祖 = 昆^{クン} 貢^{クンチヨク} 嘉波^{ゲルボ} 本山 = 薩迦寺^{サキヤ}

薩迦派の開祖は天孫降臨伝承を持つ神聖家系昆一族の貢嘉波⁴⁶⁾で、同派は昆氏の系統から選ばれる世襲制である。同派の基盤は、開祖の貢嘉波が卓彌^{ドクミ}⁴⁷⁾訳経官から伝授された新訳密教「時輪タントラ」である。有能な人材を多く輩出しており、サキヤ・パンディタ(1182～1251)は、出家教団の戒律問題の規範を提示した「三律儀分別」などを著す一方、モンゴルにおいても布教し活躍した。13世紀に登場したサキヤ・パンディタの甥の八思巴⁴⁸⁾は、パスパ文字を創作したことで知られるが、元朝皇帝の師となり、全チベットで権勢を誇って13万戸の統領となり、薩迦派の全盛期を築いた。俗に花教とも呼ばれる。

《噶舉派》開祖 = 底^{カギユ} 洛巴^{テイローバ}⁴⁹⁾ 本山 = 楚布寺^{ツルブ}

噶舉派はインド在家の密教行者の底洛巴を開祖とする。“噶”とは佛語を表し“舉”は伝承を表す。インド後期密教に基づくヨーガの神秘体験と師弟間の秘伝寺喜寿を必須とするのが特徴である。僧侶は白衣の葬儀を着るため俗に白教とも呼ばれる。多くの分派があり、噶瑪噶舉派^{カルマカギユ}がチベットで最初に「転生活佛」制度を導入したことで知られる。

《格魯派》開祖 = 宗^{ゲルグ} 喀巴^{ツオンカバ} 本山 = 甘丹寺^{ガンデン}

チベット佛教の中で最も新しい格魯派は、その頂点にある法王ダライラマの存在から見ても現在チベット佛教最大の宗派である。格魯派は僧侶が黄色い帽子を被ることから黄帽派とも呼ばれる。同派は戒律を重視することで知られるが、従来の密教は性的ヨーガの実践により、戒律を無視し、乱れた傾向にあったため、宗喀巴は顕教を完全に修めた者だけが、無上瑜伽タントラの実践を許可されるとし、顕教を重視して倫理道徳、戒律を重んじた。

なお、紅帽派、黄帽派、花派、白派といった宗派の呼び方も、外部の者がチベット語では言い難いために付けた呼称であり、現地では使われない名称である。

三、〈甘南藏族自治州〉

1. 歴史

甘肅省は、中原の西北部に位置するが、現在の中国の国土から見るとちょうど中心にある。甘肅は、甘州（現：張掖市）と肅州（現：酒泉市）の第一字を合わせた名称である。

春秋時代（前770年～前403年）は秦と異民族の西戎^{せいじゆう}に属し、秦代（前221年～前206年）には隴西・北地両郡が置かれ、西部は月氏に属した。漢代（前202年～8年）は涼州が置かれ、金城郡白石泉の郊外地であった。後漢代（25年～220年）には金城郡が廃止され、河関郡隴西郡に改定された。三国時代（220年～280年）には魏に属し、西晋時代（265年～316年）には涼の管轄であった。

唐代（618年～907年）には隴右道が設けられるとともに、一部が関内・山南両道にも属したが、唐の勢力が弱まると吐蕃の領土となった。宋代（960年～1279年）初期は陝西路に属したが、のちに秦鳳路が分置されるとともに、一部が永興軍路と西夏に属した。元代（1271年～1368年）は陝西行中書に属し、のちに甘肅行中書省が分置され、明代（1368年～1644

年)は陝西布政使司に属し、清代(1644年～1912年)に甘肅が設置された。中華民国(1912年～1948年)成立後、青海西寧道の循化県を設置、現在の中華人民共和国(1949年～)の成立後、1953年に甘南藏族自治州、1954年に甘南藏族自治州⁵⁰⁾と改称され、夏河⁵¹⁾・碌曲⁵²⁾・瑪曲⁵³⁾・選部⁵⁴⁾・舟曲⁵⁵⁾・卓尼⁵⁶⁾・臨潭⁵⁷⁾の7つの県が州の管轄にはいった。

2. 地理と人口

中国政府の統計資料(90年出生人口調査)によると、甘肅省の人口は2378万人、うちチベット族は367,000人。甘南州の人口は592,300人、うちチベット族は276,000人である。甘肅省のチベット族は甘南州に集中しており、なかでも夏河県は、人口139,637人の62%にあたる86,600人がチベット族であり、甘肅省チベット族人口の23.6%が集中する地域である。ちなみに中国内のチベット族は前掲の表にある通り全国に459万人いる。

甘南藏族自治州は、甘肅省の南部、西は青海省黄南藏族自治州・果洛藏族自治州に接し、南は四川省阿壩藏族羌族自治州に接しており、チベット文化圏としては最東端に位置する。総面積38,748 km²、最高海拔は選山の主峰が4,920 m、最低地点は瓜子溝口の1,172 mで、平均海拔は約3,000 mある。地形は全体的に西北部(チベット自治区・青海省)から東南方向(陝西省・四川省)に向かって傾斜しており、その先は陝西省の秦嶺山脈にまで続く。

面積では日本の関東(一都六県で32,144 km²)よりやや大きく、北アルプス白馬岳(2932 m)・立山(3015 m)といった高さに関東平野があると考えてみれば想像がつくかもしれない。人口約60万人であるから人口密度は17人/m²にしかない。北海道でさえ73人/km²であるから、まさに広々とした大自然が続くのである。居住している民族はチベット族のほか、漢族・回族などもいる。

夏河県下には8つの郷があり、唐尕昂郷⁵⁸⁾はそのひとつである。唐尕昂郷政府の資料によると、唐尕昂郷の人口は2,970人、うちチベット族は2,400人、漢族が430人、回族が140人。人口のほとんどがチベット族であり、チベット族の人口比率の高い甘南州でも正にチベット族の町である。また唐尕昂郷は16の村からできており、総戸数560戸強である。

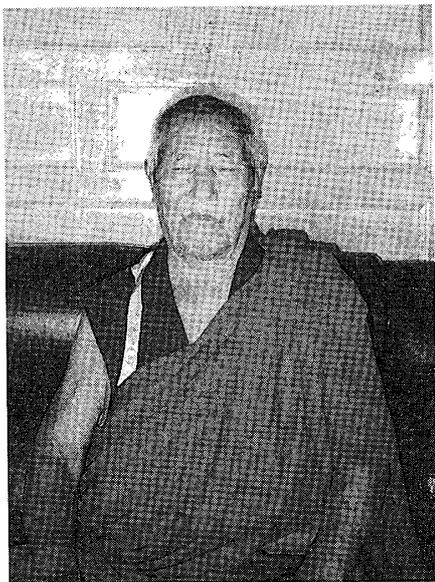
唐尕昂郷の山の最高地点は2,900 m、気候は寒冷で冬が長く夏は短い。冬は雪・雹(ヒョウ)が多く、平均気温2.6℃以下である。

郷の歴史について残っている資料はないが、栄悟寺⁵⁹⁾の現在86歳の長老僧である比丘羅桑桑珠師⁶⁰⁾によれば、生まれてから今日までの災害で記憶しているのは、大雨が一回降り山崩れで民家が破壊されたことが一回あっただけで、それ以外の天災地変は全く経験したことがないという。郷の人々はこれを、日々の祈りを欠かさず、佛教の教えを守ってきたからだと信じており、それほど自然環境に恵まれた場所である。

3. 経済

唐尕昂郷にはこれといった産業はなく、半農半牧主体で、ほとんど自給自足の生活をしている。

夏河県全体の耕地面積は7700畝(513.3 ㊮)。但し、山中の傾斜地にある畑の面積は含んでいない。この山中の耕地面積は3100畝(206.7 ㊮)余りあるが、気象条件によって日照り



栄悟寺の最長老僧、前任の主持である比丘羅桑桑珠師

になったり、寒気が来ると荒地になったりするため、多くの食糧を獲るには向いておらず、敢えて含んでいない。耕地・非耕地、山川・森林などの総面積は、約78.6万畝（52400 畝）である。

地形は中心を大夏河という黄河に続く川が走り、両側は山林と高原で覆われている。山林は松・柏が生い茂り、一年中青々としている。谷間にも松・柏・樺、川辺には低木の灌木が茂る。山中の森林には馬・鹿・兔・狐、そして多数の鳥類がいる。高原では、牛・馬・ヤク⁶¹⁾・チベット羊等約2万頭の家畜が放牧されている。

農業では、水田がひかれ、小麦・裸麦が播かれる。畑には蚕豆・えんどう豆・菜の花・胡麻・ジャガイモなどが植えられる。水田の1畝（6.7 畝）の生産量が300 kg、畑の1畝の生産量は150 kg。作物は全て無農薬で栽培され、化学肥料は一切加えられないが、この作物は自給自足を賄うために作られるものであり、商品とはならない。

唐尕昂郷の1997年度の一人あたりの年間所得は730元（1元＝16円換算で11,680円）、月所得は60元（960円）であった。90年の年間所得は368元（5888円）で、倍にはなっているが、郷人民政府の役人である才讓扎西氏曰く「生活が豊かになったのではなく、物価が上昇したことによるものだ」とのこと。

中国の生活収入は、国家統計局発行の資料によると都市生活者で年間所得4,377元、農村生活者で1,926元であるから、この地域の所得収入がいかに少ないか分かる。

郷内では、自給自足の生活をしているため、経済活動はあまり必要とせず、例えば住いを建てる木材を調達するには、寺から施しを受けるか、自ら断りなく森林を伐採して来て、建築材に充てている。しかし森林の伐採については、国有林として管理されているため、本来は国家によって禁止されている。

金銭が必要な時は、家畜或いは木材資源を市場に持って行き、売ることによって現金を得ている。今の相場では、牛一頭1000元、羊一匹250～300元で売ることができる。

4. 人口問題

1982年中国政府が甘南州で、〈甘南藏族自治州計画育成実施法〉を公布した。その中で、放牧地域に住み、交通に不便があり、労働力の足りない半農半牧のチベット族は、子供を3人まで産んでもよいことになった。83年より実施となったが、実際には強制しなかった。96年に公布した新しい規定によると、唐尕昂郷では子供は2人だけしか認めておらず現在は厳しい人口制限を行っている。96年以前は、一家庭に子供が7～8人いることは珍しくなく、10数人いる場合もあり、平均では一家庭に子供4人、父母、祖父母の3世代が同居しているのが現状である。

また90年から制限以上に子供を出産すれば、子供1人に対して500元の罰金が課せられるようになった。彼らの年収から見て大金であり、規制の厳しくなった現在では法律を厳守せざる得ない状況になっている。

甘南州には拉卜楞寺があるためか、非常に宗教の社会的地位が高く、唐尕昂郷も“ラマ村”と呼ばれるほど信仰が厚く出家僧が多い（一人も出ない村も多くある）。回族が回教（イスラム教）を信仰している以外、ほとんどの者がチベット佛教を信仰しており、郷内にある佛教寺院は栄悟寺のほか、曼隆寺⁶²⁾、扎西寺⁶³⁾がある。郷人民政府の資料によると、出家僧侶の総数は110人、27人に1人は僧侶になるため出家していることになり、出家率が非常に高いことがわかる。

宗教的理由以外で出家する場合もあり、貧困により親が子供に食べさせることも大変で、教育を受けさせることもできないために出家させることもある。

96年以後、国家政策の実施により子供は2人までとなった以上、長男は家に留まり親の面倒を見なければならないチベット族の習慣があるため、出家者も減るのではないかと思う。

5. チベット族以外の民族

この郷に漢民族は人口の1/6しかいない。この漢族が居住するようになったのは1958年の文化大革命時代、宗教改革によって派遣された人々が初めである。それ以来、この地に居住しているが、漢族の多くは文革当時に恐らく学習のために下放されたものと思う。彼らの言語・習慣は現地人と同化している。いわゆる漢族らしい習慣といえば、チベット族が宗教上の理由で食さない鳥を食し、訛りの強い中国語を話すことである。

回族との関わりには歴史的な事件が起きている。1917年、国民党につながる軍閥が隣の臨夏に侵入し、2千人余りのチベット族が殺害され、三十を超える寺院が破壊された。回族の馬麟が率いる軍閥の軍隊が拉卜楞寺に駐屯し、寺院の慣習に対して口出しするようになった。

拉卜楞寺でも1928年、軍閥の馬伸英（やはり回族）の軍隊が来て、僧侶を殺害、貢唐倉大師の祭壇を焼き、現地の人々と衝突を起こすという事件が起きた。この事件がきっかけで、唐尕昂郷の人々が回族を嫌い、現地から追い出すようになった。20世紀初め、甘南州には多くの回族がいたが、現在では140人ほど住んでいるだけである。この回族は、文化大革命時に移り住んで来て、そのまま残った人々である。

古代より甘粛省は河西回廊として、また青海・四川・チベット方面への要衝でもあり、多くの種族との親交があった。特に隣りに寧夏回族自治区があり、回族との繋がり強く、それぞれの民族が尊重しあい同じ地で居住している。互いに宗教の信仰は厚く、それぞれの民族は全く違う気質を持ち、相容れない文化を持ち、歴史的には困難な時期もあったが、現在ではチベット族が農耕、牧畜を営む一方、回族は商人として長けており、それぞれが役割を分担して生活しているように見える。

6. 生活

私が調査研究に訪れた時、電気が通じていなかった。2年前まで電気が通っていたが、変

電設備が壊れ、修復されてないとのことだった。しかし住民は何の障害も感じず生活しているようであった。郷内にはテレビを持っている家庭もありアンテナも立っているが、停電で不便だと思っている様子はなかった。

2、3軒ある商店（雑貨店）の1軒が自家発電し、週に1回は軒下にテレビを持ち出し、1人一角（1.6円）で上映会を開いている。電話機は人民政府に1台あるのみで、携帯電話も通じなかった（ちなみに中国の携帯電話は、衛星方式のため全国何処でも繋がるはずなのだ）。

なお、この11月に私が北京にいた時に聞いた郷政府の話によると、電気は通じるようになったそうだ。

郷の人々の食生活は、“ツァンパ”と呼ばれている、大麦（中国語では“青稞”）を炒って挽いた粉に自家製のバター、好みにチーズや砂糖を加え、熱湯またはバター茶を注いで団子状に捏ねて食する。これがチベット族の主食であるが、唐尕昂郷では、カレー粉、香辛料を少々混ぜた乾パンも主食としていた。

年に何回かは、例えばチベット族は夏に1週間ほどバカンスとして登山し、高原でピクニックをするが、その時だけ牛または羊を塩茹でし、羊の腸に香辛料をたくさん入れてどろどろに煮たものを食べる。その他には小麦粉を“油条⁶⁴”の様に揚げた揚げパンなども食べている。油は主に菜の花から採取した油を使う。

客人をもてなす際にはツァンパやバター茶を出し、キャンデーを出す場合もあるが高級品である。砂糖などの甘味料は貴重品である。

四、〈拉ト楞寺〉

1709年（清朝康熙48年）、青海和碩特前首旗^{フシヨトウ}河南蒙古族の貝勒察汗丹津親王^{ベイレンツァハンダンジン}が迎え、第一世嘉木様阿旺宗哲大師⁶⁵が拉ト楞寺⁶⁶を建立して主持となり、佛の教えを世に広めた。青海和碩特前首旗とは、現在の青海省黄南藏族自治州の辺りにあった蒙古族地区の統領の意味である。

拉ト楞寺は、正式には“噶丹夏珠達爾吉扎西鄴蘇琦貝琅⁶⁷”という。夏河県拉ト楞鎮の西側に位置し、チベット語での意味は、「喜を具え修を講じ栄える、マニ車⁶⁸右回りの寺」である。人々はこの寺院のあたりを扎西奇と呼ぶことから扎西奇寺⁶⁹とも呼ばれる。のちに嘉木様⁷⁰（ジャムヤン）第一世活佛大師が“拉章⁷¹”の宮殿（チベット佛教では高僧の宿舎のことをいう）を落成し、厳密な“拉章”組織を制定したうえで、寺院の教務及び地方政務などの実務執行の責任を明確にした。人々は、嘉木様第一世活佛大師を敬愛し、この寺を“拉章扎西奇寺”とも呼んだ。年月を経てしだいに“タシーキル”の文字が省略され、“ラジャン”の文字も発音変化から“ラプラン（拉ト楞）”へと変わっていき、現在の名称となった。

拉ト楞寺の“教え”の骨格は、顕教⁷²と密教の両方である。拉ト楞寺が属するチベット佛

これを修了しなければ密教を勉強する事はできず、修了できずに何年も顕教を学んでいる僧も多い。顕教を学ぶ院を聞思学院、密教を学ぶ院を統部上・下院という。拉卜楞寺では、ほとんどの僧が顕教を学習している。寺院内に“聞思学院⁷³⁾”、“統部下院⁷⁴⁾”、“統部上院⁷⁵⁾”、“医薬学院⁷⁶⁾”、“時輪学院⁷⁷⁾”、“喜金剛学院⁷⁸⁾”の六大学院がある。所有する経典・書籍の数は68,130点もあり、ラサを含めた中国にあるチベット佛教の寺院では最大数の蔵書を抱える。

この寺院は、甘南州で最も地位の高い寺院で、安多地区の政治・文化・宗教・教育の最高中枢機関であり、チベット族は、達頼喇嘛を〈日〉、班禅喇嘛を〈月〉、そしてこの拉卜楞寺の最も地位の高い活佛、嘉木様を〈星〉と尊敬して称するほどの影響力を持っているのである。

チベット佛教の総本山は、ラサにある“ポタラ宮”であるが、達頼喇嘛が不在の現在、文革で破壊された建物も完全に修復され、政治力も保持し、学術研究書籍の数は言うまでもなく、僧侶の学力水準も高く、本来のチベット佛教の姿を残している寺院は拉卜楞寺しかない。

寺の占有地は86.8 ha、建築様式はチベット式と漢式（宮殿式）の混合である。1950年には、僧徒が3424人、活佛が68人、大小の僧侶官が564人もいたが、現在では僧侶は全体で500人余りしかいない。1982年、中国国務院により正式に全国重点文物保護機関に指定された。

拉卜楞寺に所属する寺院は108ある。これは経典が108巻あることからきており、108という数字は吉祥を表す。但し対外的には108寺といているが、実際には増えつづけている。所属する寺は、三つの形式に分けることができる。

- 甲 政教の二権を管理する寺院で、21寺。
- 乙 教務管轄が拉卜楞寺である寺院（拉卜楞寺は教務を管理するが、政務管理の権限はない）で、33寺。
- 丙 宗教上、密接な関係にあるが、直接には政教実務を管理されていない寺院で、40寺。

五、〈栄悟部落〉

唐尕昂郷は、その甘粛省蘭州市から四川省成都市まで通じる国道213号線を南下し、351 kmの標識がある川沿いの西側一帯をいう。東南には合作市⁷⁹⁾、西南には夏河県扎油郷、北部には完尕灘郷などが隣接する。

正式名称は「甘粛省甘南藏族自治州夏河県唐尕昂郷」という。甘南藏族自治州の州政府（行政機関）はここから更に50 km南下した夏河県合作市にある。唐尕昂郷の名称は行政によって定められたものであるが、現地人は“栄悟部落⁸⁰⁾”という名称を使う。栄悟部落は、



拉卜楞寺の一部

5年前に蘭州—成都間の国道ができるまでは、西北40km余の地点にある「拉卜楞寺（ラプラン寺）」へ参拝に行く信者が徒歩で、或いは馬に乗り向かう為に必ず通る重要地であった。拉卜楞寺はチベット三大地区のひとつアムド（安多）地区において、中国全土のチベット佛教寺院に最も影響力のある大寺院のひとつである。アムド地区全ての人々にとって、全ての精神の拠り所であり、宗教のみならず政治・経済の中心地でもある。

周・秦兩代、西羌の地であった頃から、この部落という社会組織の基盤ができていた。吐蕃が河隴を占領し、西羌と吐蕃の部落が統合され、その中で部落は制度として成熟していく。五胡十六国時代から宋代まで、中央の王朝勢力の完全なる支配は届かず、政治上の統一ができないため、この地域では民族、部落間の紛争が絶えることはなかった。部落組織は外部から自らを守ろうとするため、より強固な組織となり発展していった。

元・明代には、部落と中央王朝が妥協をはじめ、地方行政組織となった。この関係は1958年に中国が制度改革を実施するまで続いた。

もともと甘南州は他のチベット族地区よりも内地に近く、古来より歴代の中央王朝に比較的重要視されていたが、元・明兩代には、この地方への統括機能が更に高められていったのである。中央王朝の許可制による官吏人事を取り入れ、各部落の首長を官吏に任命したことにより、部落の首長も朝廷の力を借りて勢力拡大を画策していったのである。

甘南州のこの唐尕昂郷付近は地理的に外部との連絡が取りにくい高原であるため、部落規模の大小の差が大きく、1つの大部落ができると下に小部落が生まれる構造になっている。このため部落の数が分かりにくいほど複雑に存在しているのである。生活環境には厳しい自然条件が伴う地域ではあるが、狭い範囲内に部落がひしめき合うため、自給自足の生活維持には何かと便利でもあったようだ。

政治

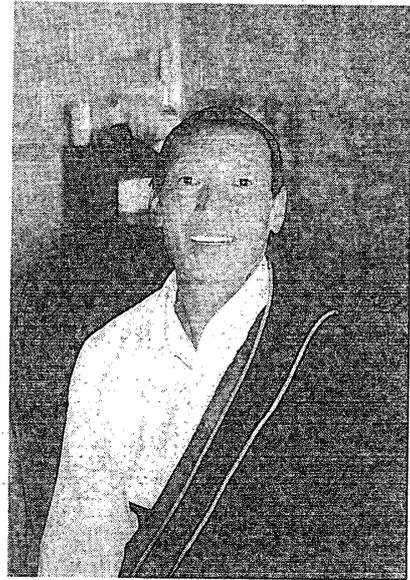
明代（1368～1644）、チベットは、明朝政府の直轄地ではなかったが、布政司が置かれていた。明朝政府は、甘肅・青海・チベット地区に対し、元代（1279～1368）の農牧分割統治の方式をそのまま採用し、政府直轄地に近い地域のチベット地区では土司制度⁸¹⁾を実施、遊牧地区を中心にこの制度が遂行された。

歴代の王朝は西南・西北の辺境地の安定を保つため、現地の部落に世襲制の官職を与え、土地と民族を掌握させた。地位で言えば、今の唐尕昂郷政府郷長にあたる。元王朝から始まったこの土司制度は、明王朝で正式な制度として完成され、清王朝でも踏襲された。中華民国となってからも大きな変化はなく採用され、1958年に中華人民共和国共産党政府がチベット制度改革を実施するまで続けられた。甘南州でも政治権は土司の手中に掌握され、栄悟寺も当然例外ではなく、栄悟寺の建立当初から寺院の土地と神民⁸²⁾は土司から下賜されたものであり、いずれも土司の所有に属し、土司の支配下に置かれる形となっていた。

1958年、当時25歳だった土司の王天民⁸³⁾氏はチベット制度改革によってその官職を取消された。

理由は以下のようなものである。

- ①土司は封建主義の現れである。国民党政府に協力した（当時は共産党政府前の国民党政府から任命された官吏であり、国民党员でもあった）。
- ②323年間も大衆を搾取した大罪（すでに土司は正式な官職ではなかったが、影響力は依然としてあり、郷政府が事あるごとに土司の協力を求め村民に従わせてきたため。過去、土司の命令は絶対的なものであったため、権利がなくなったとはいえ土司に相談し支持を得なければ村民が従わなかった）。寺院で法事（火供法会）がある際も土司を主持として招いていた。



58年以前、土司であった王天民氏

部落民は、土司の配下に属するか、神民として寺院の一種の奴隷に属するかに分かれていた。この奴隷制は各部落によって基準がまちまちであったようだ。

このような土司制度は元・明代より拡大していき、次第に土司と部落との癒着が成り立ち、土司の権力拡大につながる。土司の力が、中央から見て、その部落が合法であるか否かの判定基準となった。土司の権力拡大は、それまでの寺院主導型の部落に対する影響力をも強めることになり、相互の力関係によって土司統治の部落と寺院統治の部落が生まれる。場合によっては、土司が自分の部落を守るために自ら寺院を作ってしまうこともあった。それは、チベット族の宗教への信仰の厚さからも寺院のもつ力が強大であることを物語り、系統部落への影響力が確固たるものであったことを示す。

栄悟寺は、新しい寺であるため、土司制度の上に成り立っていた。

栄悟寺では寺院建立の1790年に、当時の土司が唐尕昂郷人口の5分の2の部落民を“神民”として授けた。そして残り5分の3は他の3寺院（扎西寺・曼隆寺・慈念精舎）に分配された。

扎西寺は文革以前、栄悟寺の属寺であり、慈念精舎は文革時に破壊され、栄悟寺から土地を提供してもらい、僧が1人しかいないため、法事も協力してもらっている。

3寺院への神民の分配は、5分の3の三等分ではなく、扎西寺と曼隆寺に5分の1以上、慈恵精舎に5分の1以下の割合であった。

この3寺院よりもはるかに規模の大きい栄悟寺に5分の2しか神民を与えていない点から、栄悟寺と土司の微妙な関係が読み取れる。

たしかに土司は、栄悟寺に対して敬意を払い、他の寺院より多くの神民を授けている。しかし有事の際には、自らが多数となるよう、自分の息がかかっている3つの寺院に5分の3を振分ける方法を使ったのである。

栄悟寺は毎年重要な法会を催し、司主（法会の主持人で出資者）も土司によって決められていた。

寺院同士の関係も非常に微妙で複雑だ。

1958年以前は栄悟寺の対外活動、政府との関係は土司の手中にあり、村民達のコントロールも寺院を利用し、土司が管理していた。栄悟寺を所有していた土司は、ほかに曼隆寺、扎西寺、慈念精舎をも所有していた。その中で栄悟寺が最も規模の大きいゲルグ派の寺院であった。慈念精舎だけはニンマ派であった。

宗派が違うといえども、敵対関係になるようなことはない。文革やチベット動乱により、亡くなったり国を追われたりした僧も多かったため、お互い協力し合っているのが現状だ。

正式に記載された資料はなく、言い伝えによるが、栄悟寺建立後約20年、当時土司によって寺院が干渉されることが多く、それを避けるために甘南州で宗教・政治において最も影響力のある活佛の賽倉・伽項扎西第3世⁸⁴⁾を招聘し、寺院の活佛の指導に当たってもらうことで、当時の土司の権力を牽制していたという。それ以後、現在の第6世活佛まで栄悟寺活佛の指導に当たっており、栄悟寺の現在の主持である丹木切師も彼の弟子である。

賽倉第1世伽項扎西師は拉ト楞寺創設者の嘉木様第1世と拉ト楞寺建立に尽力した功労者の一人である。彼は嘉木様の職務を引継いで第二代大法台となり、甘南州の各寺院から非常に尊敬された。賽倉第2世は夏河県境界内の沙溝地方に独立して徳爾隆寺⁸⁵⁾を建立し、信徒を集め佛法を広めた。

この活佛の招聘は、周りの寺院・部落において複雑で微妙なバランスを保つ政治的な目的に使われていることが分かる。

拉ト楞寺では、嘉木様第1世亡きあと、清朝政府の要望もあり、青海省から嘉木様第2世活佛を招き入れ、青海省の後ろ盾によって影響力をつけた。

徳爾隆寺でも、拉ト楞寺との関係が悪くならず、かつ権力の均衡を保てるよう、やはり活佛を迎えた。栄悟寺も土司との関係が悪化したため、後ろ盾となる徳爾隆寺で認定された活佛を栄悟寺の活佛として招聘し、唐尕昂郷の土司に対抗した。

栄悟寺にしてみれば、拉ト楞寺だけでなく、徳爾隆寺の後ろ盾を手に入れたことで強力に土司に対抗できた。徳爾隆寺としても、拉ト楞寺系列の栄悟寺に活佛を送った(派遣した)ことで、拉ト楞寺に対して良好な関係を保つシグナルを送れたのである。

このように土司—寺院、或いは寺院—寺院の関係構図は、この小さな部落のなかでも非常に複雑で微妙な関係を保っていたのである。

また土司はその代によっても違い、ある代は土司本人が活佛として生まれ、政治のみならず寺院の主持となって宗教活動を行うこともあった。

総じて言えば、部落内の政治上の仕事は土司の管轄であり、宗教・文化・村民・生活については寺院の責任であった。

部落民のほとんどは外部に出ることがなかったが、最近、中国経済の改革開放政策の影響により、一部の家から臨夏の市場まで作物などを売りに行く者が出てきた。

部落で最高の富裕者は、ラサまで行商している家庭の次男か(長男は家を守る義務があり、行商に出ることはない)、栄悟寺の副主任で財務を担当している者だ。

「外国で」と考える先は“インド”である。しかし、この部落の大多数の人々は今の生活に満足し、外部に出て行くことはあまりなく、ラサに行く者は少なく、ましてやインドまで行く者となるともっと少なく無きに等しい。今以上の裕福な生活をとは思わないらしい。

この200～300年、唐尕昂郷に外部から人がやって来たことはほとんどない。まして宿泊施設などあるわけもなく、たまに違う言葉を耳にするとすれば、拉卜楞寺を参拝する福建・広東からの信者だそうだ。蘭州-成都間の国道ができてからは、車を止めて休憩する必要もなく、素通りすることが増えた。

筆者がこの部落を尋ねたことは部落内の誰もが知っていたが、チベット族の女性には特に尊敬された。チベット族では女性の地位は低い。チベット佛教の世界にも尼僧はいるが、偉くなることはなく、女性は成人すると、結婚しなくては生活していくこともできない。筆者は女性として社会で独立し生計を立てていることで部落内で尊敬されたが、特にチベット族の女性からは、非常に羨望の眼差しを受け尊敬された。

今までこの部落に来たことのある社会的地位のある人物は、夏河県長だけだそうで、筆者は初めての外国人として、且つ独立した成人女性として歓待を受けた。

六、〈栄悟寺〉

1. 歴史

寺の歴史について資料を探したが、文化大革命の時代に弾圧されて焼き払われたため、ほとんど残っていなかった。主持の手元にある手書きの資料くらいしかないので、主持と寺の建設に携わった88歳の長老の僧侶を訪問し話を伺うことにした。

この寺の1958年から今日までの歴史や出来事について、そんなことを聞かれるのは初めてだといわれるほど資料らしきものもなかったが、歴史について手に入れた資料を下記の通り整理してみた（本文中にある固有名詞はチベット語を漢訳して表記する）。

本寺を建立したのは、拉仁巴羅藏切増2世活佛⁸⁶⁾である。この活佛は、1784年、栄悟部落の隴雲村において、父“供巴現”母“呀哦就吉兒”の間に生まれた。7人兄弟の長男であり、チベット族の慣習として、長男は家にいて父母の面倒を見ていかなければならないしきりであった。

年頃になると父母は早速、結婚相手を捜し出し、式の準備を始めてしまった。家族が長男の婚礼の準備に追われている頃、彼は本心ではないと思って家を飛び出し、阿窮下忠活佛の下に行き、佛門に入って出家した。“拉仁巴羅藏切増”という法名をいただき、活佛の指導の下、文字と経典の勉強に励んだ。

15歳の時、学問を求めてチベットのラサに向かった。ゲルグ派の開祖ツォンカパが建立した本山^{ガンデン}喀且寺において哲学院に入り、多くの著名な学者達の講義を拝聴して、佛教の経典、実践の勉強に励み、25歳の時、西藏喀且寺佛教哲学の博士号を取得した。

当時のダライラマ6世倉央嘉措^{ツァンヤンギヤンツォ}大師⁸⁷⁾ (68歳)が、喀且寺を訪れた時、ダライラマは政治・宗教の歴史について多数の問題を出したが、彼は即座に回答したため、誰もが彼を尊

敬し、注目を集めることとなった。

37歳（1820年）の時、佛学佛理論経の最高学位を取得し、多くの修行を積んだ後、沙拉地切幾布寺院の堪布⁸⁸⁾に任じられる。

43歳（1826年）の時、アムド地区に戻り、四川省の加隴西拉扎布唐で閉関（門を閉じて訪客を謝絶する）修行を3年行った。その後、即門地区に精舎（佛教学院）を建立し、堪布を8年務めあげた後、^{タール}塔爾寺⁸⁹⁾等各地の寺院を巡り訪ね、故郷に戻った。

1790年、風水に優れた高僧伽爾格東珠加措を栄悟部落に招いて風水を見てもらったが、この場所は昔から高僧が修行する場であることが分かった。森林が象形（法をそなえる形）であり、寺の前に当たる所には清涼な水が流れ、佛に捧げる聖なる水を表している。東西南北に吉祥の相が出ており、拉ト楞寺以上の場所であることが分かった。特に寺の場所から南西の方角の草原は無量空母が修行した場所であるといわれた。また周囲はみな薬草が生い茂る草原でもある。確かに、森林があり鹿や麝香鹿などが生息し、小川が流れ、小鳥がさえずり、自然にその中に引き込まれていく美しい景観である。国道もあり、往来する者がいない訳でもないのに、正に人間の仙境を彷彿とさせるぽっかりと空いた空間である。

ここにある山には霊水が流れるといわれる場所があり、そこで修行を積めば非常に高い成就に到達できるといわれている。

そこで^{ラレンバルオツアンチエツアン}拉仁巴羅藏切増2世活佛は、この土地に寺院を建立することを決めた。栄悟部落の名をとって栄悟寺聞思興盛学院という名称になり、現在は栄悟寺となった。

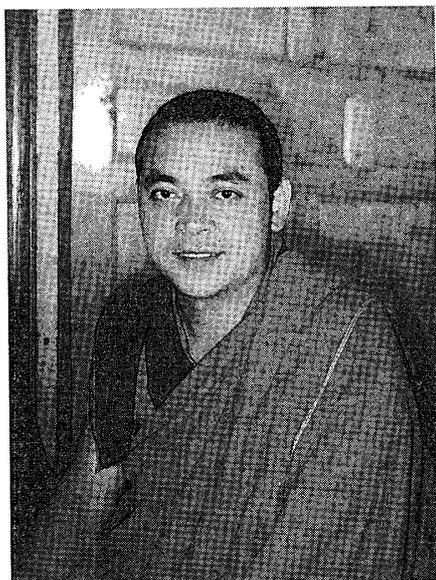
栄悟寺の創立者である拉仁巴羅藏切措は、栄悟寺の建立に取り組み、しばらくの間主持を務めた後、拉ト楞寺の嘉木様二世貢去乎晋美旺波大師⁹⁰⁾を訪問した。拉ト楞寺で嘉木様二世が擁する佛法を受け、聞思学院の法台⁹¹⁾を務め、佛法經典の教務最高責任者を任された。その後、拉ト楞寺の第6世法台（六大学院もを含む）を務め上げ、多大な貢献を残して栄悟寺に戻り、1862年、栄悟寺にて円寂された。享年79歳だった。

このようなことから、栄悟寺は規模が小さく、とても拉ト楞寺には及ばないが、だからといって地理的に非常に近いところに有りながら拉ト楞寺系列の寺院であっても属寺ではなく、拉ト楞寺からの干渉を受けない寺院である。

栄悟寺の現在の主持である丹木切加措は、20歳の時（1989年）から拉ト楞寺の門をくぐり、休む日なく学習し続け、4年後の1993年に栄悟寺に戻った。現在も拉ト楞寺の僧侶宿舍にある50坪の四合院⁹²⁾に住居があり、栄悟寺で法事が無い時には、拉ト楞寺の書齋に寄宿して研究を続けている。

丹木切加措氏の履歴を紹介する。丹木切加措の「丹木切」とは宝物の意、「加措」とは最上人の意味である。

1965年5月5日、中国甘肅省夏河県唐尕昂郷当科村に生まれる。父母は牧畜業を営み、家庭環境は中の上クラスであった。家族は上に兄が1人と4人の姉妹がいた。



栄悟寺主持の丹木切加措

1977年に栄悟曼瑪小学に進学し、83年10月15日、出家して栄悟寺で経文を習い、1989年初め拉ト楞寺において学ぶ。栄悟寺に文革後復活した最初の出家僧であった。

同年8月甘肅省佛学院の試験に合格、同学院に入学し、93年5月に卒業した。

卒業後、栄悟寺に戻り藏文文法教師を担当し、94年初め、栄悟寺管理委員会主任に就任する。

95年10月25日、台湾佛教会に招待され、台湾のテレビ局のインタビュー番組で4ヶ月間出演する。各地で講演をおこない、台湾全土の佛教学会で大きな反響を呼ぶ。

97年、栄悟寺の主持となり、同年9月23日、中国国务院宗教事務局の推薦で、チベット佛教の最高学府

たる中国藏語学科佛学院において研究に取り組む。

栄悟部落では約300年前までは村民の大部分がチベット民族の土着宗教であったボン教を信仰していた。それがなぜチベット佛教を信仰するようになったのか——言い伝えが村に残っているので紹介する。

〈今から280年ほど前、村ではしょっちゅう禍が絶えず村人達はほとんど困り果てていた。ある日、泥棒が栄悟部落に牛を盗みに来た。村人がみんなで泥棒を追いかけて拉ト楞寺の辺りまで来ると、泥棒は見えなくなってしまった。すると突然、寺から年老いた和尚が出てきて東南の方角を指差すので見てみると、寺から40キロ余りの所に一筋の狼煙が上がっていた。和尚は村人に「あのところに不吉な気が漂っている。これから穏やかな生活はできなくなるぞ」と伝えた。あのところとは正に栄悟部落の方角であった。村人達はすぐに寺の佛様を拝み、村に戻ってから佛様を拝むようになった。そうすると禍が起こる事もなくなり、村人はみんな佛教を信仰するようになった。〉

2. 組織

〈寺院の管理〉

寺院の管理には二つの組織がある。

- ①寺院管理委員会
- ②管理委員会

寺院管理委員会は、4人の委員から成り立ち、主持が僧侶の中から選び出し、郷政府の同意を得て決定となる（郷政府は寺院との約束により人選過程について干渉しない）。

管理委員会は、16ある村から在家信者1人ずつ出し計16人で編成される。人選は、寺と前任の土司によりほぼ決定され、郷政府の同意を得ることになっている。だが、事実上ほとんど寺院の意向が通ることになっている。

この管理委員会の任務は、

A：寺院の重要な法事などを、村長を通して村民に通知すること。

B：寺院の重要事項（大殿の建て直しなど）の計画に参加し、決定事項の細部（どこから徴収するか、労力を集めるか）を決め、実施（監督）すること。

寺院管理委員は、現在下記のようになっている。主任（法台）一主に教務、読経の責任を司る。

29歳の僧侶が担任している。

副主任一財務の責任を司る。30歳の僧侶が

担当。当地資産家の家庭の子息である。拉卜楞寺の伝統で、財務は必ず裕福な家庭から出た僧侶が担当する事になっている。

栄悟寺における小僧の時間割

	時 間	内 容
1時限	6:00～ 9:00	教典など学習
	9:00～ 9:30	朝食
2時限	9:30～12:30	読経
	12:30～ 16:00	自由時間(休憩)
3時限	16:00～ 20:00	読経
	20:00～	夕食後、就寝

栄悟寺における小僧の時間割

掌堂師一規律規則遵守、秩序維持の責任者で、俗に鉄棒喇嘛とも呼ばれる。1名。

学校長兼教員一もと栄悟寺の僧侶で、今年67歳になる老僧であるが、文化大革命の時代、無理やり還俗させられた。文革終了後、妻と子に家と生活費を与え、友人に世話を頼んで、独り自分の布団だけ抱えて栄悟寺に戻った。しかし自ら一度俗世に汚れた身であるから、僧として法衣を着る資格はないとし、一生涯、学校で小僧達の教育をみることを願い出て、栄悟寺学校の校長兼教員となった。

僧侶の大部分は部落の人間であるが、合作市や他の郷から来た者もいる。

上下関係ははっきりしており、主持である丹木切加措は86歳の老僧や自分より年配の学校長もたいへん尊敬している。僧侶同士は互いを尊重しあい、規律は非常に厳格で、大殿で読経が行われる際には、その関係が如実に現れる。しかし私生活の面では家族や兄弟より親しく争うことも少なくない。

3. 政治

〈栄悟寺僧侶の年齢〉

年 齢	人 数	年 齢	人 数	年 齢	人 数	年 齢	人 数
86歳	1名	23歳	3名	18歳	3名	9歳	1名
67歳	1名	22歳	1名	16歳	4名	8歳	3名
30歳	1名	21歳	2名	15歳	2名	合計	38名
29歳	1名	(以上は、戒を受けて僧になったもの)		13歳	1名	僧侶の数	14名
28歳	1名			12歳	4名		
26歳	1名	20歳	1名	11歳	1名	小僧の数	24名
24歳	2名	19歳	2名	10歳	2名		

※文化大革命が原因で、僧侶年齢の30歳代～60歳代間は空白になっている。

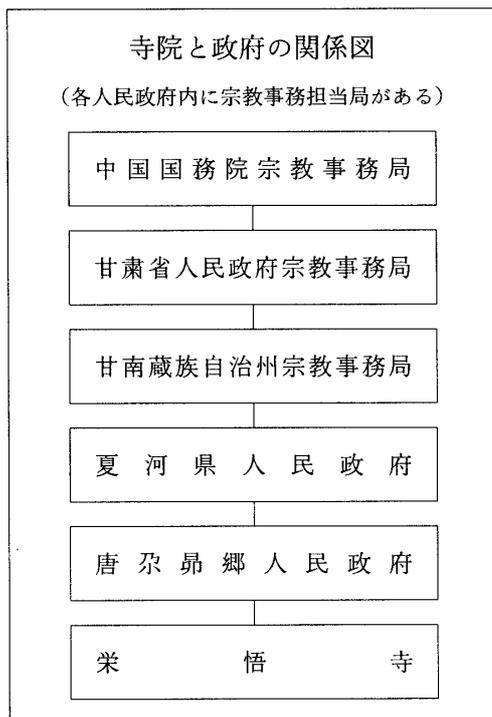


寺院の屋根に立ち、筆者を見送る 11 歳の小活佛

組織上は郷人民政府の管轄下にあるが、実際には郷人民政府は、寺院と土司との協力により当地の郷民を統治しているのが現実である。政府に協力する事によって、政治的に有利な立場にたっている。制度上、中華民国成立以後は、自分達の“神民”に対する統治権を譲った形であったが、現在でも寺院は、過去に所属していた“神民”に対して、絶大な影響力を保持している。

唐尕昂郷人民政府は現在、郷長がおらず、副郷長が郷長代理として執務を取り扱っている。

前任の郷長は夏河県人で唐尕昂郷出身者ではないが、若くして就任し、多額の経費を学校の修復に支出するなど、非常に郷民との縁を大切にすることで、信頼が厚かった。96年に政府によって新任の郷長が推薦された。郷長人事は夏河県政府から候補者が推薦されるが、唐尕昂郷の半数以上の郷民が賛成票を投じなければ就任できないという、非常に民主的な方法を採用している。当地では、前任者の継続を望み、新任郷長は拒絶され、半数以上の同意を得る事ができなかった。現在も就任する方法がなく、当然、寺院・土司も郷民の意向に同意した。



4. 経済

1980年、胡耀邦総書記・万里副首相がチベットを視察した。その年、宗教の自由を認める政策を示し、82年に批准された。

栄悟寺にも1958年（チベット制度改革）以前の寺院所有の財産目録（建造物・土地・森林、その他不動産など）を任意で提出させ、政府の審査後、正式に寺院の財産として登記された。全てが返還された訳ではないが、それでも栄悟寺の場合、

1,000 畝くらい（66.7 畝）の土地が返還された（58年以前はこの1.5倍あったのだが）。土地の大部分は森林で、あとは農地であった。

現在の栄悟寺所有の土地総面積は、3,829 畝（255.3 畝）ある。その内訳は寺院敷地面積 24 畝（160 畝）、耕地 5 畝（33 畝）、森林面積 1,940 畝（129.4 畝）、その他非耕地及び山・川の面積 1,860 畝（124 畝）である。森林の木材総貯蓄量は 6,790 立方メートルもある。

この神民は、寺院で必要の有る時、随時労働力として奉仕し、命令に一切従うように決められていた。栄悟寺で宿舍などの改修工事を行う時、道路を修復する時など、彼らは無報酬で労力を提供してくれる。とはいえ、彼らは完全な奴隷ではなく、寺院も彼らの生活に影響のないよう配慮していた。

1958年のチベット制度改革時にこのような特権は廃止された。1982年に寺院の財産所有権が回復した時、神民の制度は廃止されたが、事実上は存在しており、村民は寺院に尽くす事が光栄であると考え、今でも寺へ奉仕している。

栄悟寺で法事がある時は、唐尕昂郷の人々全員が出席する。また、お祈りをする際には、郷内の部落が6つに分かれていることから、部落ごとに6回に分けて行っている。

a 供養⁹³⁾

83年の栄悟寺建立以来、寺院の改修は行っていなかったが、佛殿の老朽化により、95年から改修工事が始まっている。このような工事の際、政府によると国家から建築費として補助金が支給されるというが、手続きが煩雑な上、よく理解できなかったために政府援助をあきらめ、自力で工事を行う事とした。労働力はかつての神民が提供してくれたので、発生する経費については、寺院所有の森林から木材を伐採して得た現金を充て、その他の必要なものは神民からの供給で賄った。99年7月に落成する予定である。

b 収入

1987年チベットで第一次動乱（民族紛争）が勃発し、中国政府は「以寺養寺（寺を以て寺を養う）」政策を採り、人民幣8,000元を寺院に与え、使途については寺院の自由にさせた。寺院で必要のない場合は他の投資に切り替えてもよく、栄悟寺では拉ト楞寺が中心となって設立した会社「達吉公司」に株主として参加する事を決め、94年に第2期株券分配時に8,000元、98年に34,000元分の株券を購入した。

達吉公司是、ホテル・レストラン・商店・貸室などを経営し、多角経営で拡大している。

c 税

寺院は正式に国家宗教事務局より発布された認定証を所有している。この証書により不動産税、個々の僧侶にかかる所得税は支払う必要はない。また自動車税なども一切免税となる。税金面で優遇されているだけでなく、国から助成金等を受けることもできるが、国の援助は受けていない。

d 公共料金

水は川の水を汲み上げているので料金を納める必要はないが、現在電気が通っていない。2年前に電気が通っていた時、電気料金は村民が安くすむよう便宜が図られていた。寺院に電気メーターというものはなく、電燈の設置数から自己申告することになっており、一台当たりの基本料金を1角（1.6円）と定めて計算すればよいことになっていたらしい。

f 住



僧侶宿舎

18歳以下の小僧は、寄宿舍で共同生活をする。各自の部屋はないので、寝る時もみなで雑魚寝になる。18歳以上になると各自が部屋を持つことができ、宿舍を建てることを許される。僧侶は寺院の土地を借り、建築費用を各自の家から賄ってもらい、人を雇って自らの宿舍を建てることになる。宿舍の設計・装飾は僧侶自身が工夫する。栄悟寺の僧侶宿舍の大部分は、寺院が森林から木材を伐採して提供し、当地村民の労働奉仕により建

設している。建築木材は主持が使用を認め、村民が切出して運搬する。現在、僧侶宿舍の40軒中20軒は土地と木材を寺院が提供、建築作業は村民が労力を提供している。その他は村民の提供などによる。

g 衣

衣類は基本的に各自が実家の供給によって賄っている。時々主持から賜与されたり、信者(神民)から提供される場合もある。僧侶は僧衣を着るが、これはツォンカパが意匠されたもので、深紅の色であるため、荒野や森林の中にも、どこにいるのか遠くからでもはっきり分かるようになっている。戒律により、たとえ寒くなっても、これ以外のものは着てはならず、雨が降っても傘を差してはならない。就寝する時も布団などなくこれ一枚のみで過ごす。

h 食

食は僧侶各自で賄うことになっているが、実際には、信者の供養による部分が多い。非公式調査であるが、チベット自治区内の遊牧地区にある寺院収入の3分の2は供養によるもの、アムド地区では収入の10分の2が供養によるものというデータがある。

信者がツェンパなど供養する食料を集めて寺院の佛殿中央に持ち運び、階級の区別無く平等に配っている。足りない場合は各家から持ち寄っている。

5. 寺院の1年間の主な暦

栄悟寺の1年の暦		
月	日	行事
1月	1日～4日	曼陀羅法会。
	6日	早朝、主要な佛像を合掌しながら寺院を周る。1日中、ラマ舞の演舞。
	7日～10日	緑ターラー法会。
	15日	夜、酥油茶 ⁹⁴⁾ 展開催
2月	1日～26日	参籠の行 ⁹⁵⁾
	27日	出門

3月	1日～3日	吉祥天母梵讃の万回行
	5日～10日	極樂輪金剛を唱え、砂曼陀羅の作成
	10日～15日	極樂輪金剛法会
	27日～29日	十面佛母法会
4月	1日～9日	垂密金剛を唱え、砂曼陀羅の作成
	10日～15日	極密金剛法会
	16日～18日	吉祥天母法会
5月	8日～6月2日	毎晩8時～11時、佛殿にて読経
6月	3日～9日	麻尼加持丸 ⁹⁶⁾ 御供え
	10日～14日	浪山（高原にテントをはりバカンスを過ごす）
	15日～8月1日	夏安居 ⁹⁷⁾
9月	15日～20日	大咸徳金剛を唱え、砂曼陀羅作成
	21日～25日	大咸徳金剛修学、村民各家より1人以上が『八閔齋戒』 ⁹⁸⁾ を受ける
10月	8日	寺院管理委員会委員選挙（4名）及び各人事
	15日	新任管理委員引継ぎ典礼
	23日	寺院上層部による管理委員会事務運営の監察（寺院の財産目録は全て明示）
	25日～29日	10月29日は開祖ツォンカパの入滅日。5日間の法会を行う。
11月	25日～30日	供食法の修学
12月	16日～18日	酥油花御供え
	25日～29日	寺院に全ての部落の信者が集い、安全・健康・幸福などの祈禱を行う。
寺院の僧侶は上記の法事を行うこと以外に『唐三蔵』を修学鍛錬しなければならない。天文、地理、参命学、座禅、チベット医学、法具の作法、法螺貝や法会に使う楽器の練習、ラマ舞の練習など。		

七、〈栄悟寺と栄悟部落〉

1. 生

栄悟部落の民は神民のみならず、どの家でも身籠ったことを知ると必ず栄悟寺に出向き、子供ができたことを報告する。寺院では僧侶が子供の出産日を占い、無事に成長するよう生まれた時に着る服の色を指定する。

出産後、父母はまず子供に指定の色の服を着せ、抱きかかえて寺院に生まれたことの報告に行く。僧侶は子供が無事成長するようにと祈禱し、子供の将来のため何をすべきか、どのような教育をするか等を占う。そして、チベットの神々の中から名を頂き法名をつける。一般にチベット族は、ダライ、パンチェン以外の者は苗字がなく、名も僧に付けてもらうのが慣習となっている。この名はチベット文字であるので、併せて漢語訳してもらい、役所に出生届けの手続きをすることになる。

子供の成長過程において、病気にかかったり困ったことが起きたりした場合には、僧侶は常に相談にのり、普通の病気の場合は、栄悟寺内にある治療所で治療を受けることもできる。

2. 死

栄悟部落の人々は葬礼を重視している。これはこの部落に限ったことではなくチベット族全体のことであるが、村のどこかの家で死去する人が出ると、村全体が哀しみにくれ、皆で葬送を手伝う。家の中で誰かが死去すれば、家の者は先ず寺院に報告する。栄悟寺では、直ぐに僧を派遣し、故人の家で経を唱える。一般人が死ぬと遺体を7日間家に安置しなければならず、この7日間、僧は毎日日中にこの家に出向いて経を唱える。夜は、家人と隣家の村人が遺体を“解脱⁹⁹⁾”させる経をその家で唱える。一週間後、天気の良い日に遺体を寺院後方にある高原の天葬場に運んでいく。

部落の各家庭では、葬送に限らず、僧侶が自宅に來訪した時に宿泊できるよう、最もよい部屋を使わずに空けている。現地にホテルや旅館がないのが理由でもあるが、それだけ僧に対する敬意が窺える。

天葬場は高原にある上下三段の穴からできており、最上段の穴は一般僧侶用、その下が部落の男性用、最下段が女性用の葬場となっており、一般僧侶、部落の村民は天葬¹⁰⁰⁾でしか葬儀を行えない。葬儀にも位が現れ、栄悟寺の活佛、或いは身分が高く学識のある僧侶でなければ火葬¹⁰¹⁾は行われない。

遺体は穴に置かれると、かわるがわる村人によって斧で解体され、肉と骨に分けられた後、天に舞う鷹に捧げられる。

3. 教育

中国政府の教育制度でも、子供が小学校で学ぶのは義務教育であり、学費の一部は免除される。唐尕昂郷にも5つの小学校がある。しかし郷部落内の16村の内、2つの村では子供を一人も小学校に行かせたことがない。原因は2つある。

1つは村民が学校教育を軽視していることにある。彼らは、学校で学ぶ事は人生に役立つことではないと考えている。

特に文革時期に部落に押し寄せて寺院を破壊していった紅衛兵が皆学生であったことから、学校教育は子供に悪影響を及ぼし、あのようになっては怖いという印象があるようだ。文革の時期、中国政府の規定は厳しく、1つの村から最低2人の子供を学校に行かせるよう義務付けたが、部落のどの家でも行かせたくなく、相談した結果、村民が金を出し合い、貧しい家の子供を雇い、生徒になってもらうことまでしたらしい。

もう1つの原因は、地理的な問題で、自宅から学校が遠いということ。家が山の高い所にあり、毎日歩いて学校に通おうものなら、朝一番に家を出ても学校に着くのが午後になってしまい、たとえ学費がただでも授業を受けられる筈がない。

また学校自体も問題を抱えており、中国政府が作成する教育カリキュラムに則って科目や人員が派遣されるわけで、漢語のカリキュラムにチベット語が加わる形になっている。したがって、もし部落に派遣される先生が漢民族の先生であったなら、チベット語があまり話せず、先生と生徒の言葉が通じないという問題がある。教室の設備は簡素で、教育課程も体育や音楽といった授業がなく、そして彼らにとって最も重要であるはずの宗教教育もない。

昔からチベット族の文化・歴史・政治・音楽などあらゆるものの中心は宗教にあり、宗教文化こそがチベット族の学問である。小学校の教育課程はチベットに暮らす人々にとって大

した意味を持たない。宗教こそが彼らの教育であるのだ。その結果、一般の学校教育は彼らの生活には役に立たないことになる。

現状では、唐尕昂郷の子供達は適齢期になると、郷政府より通知が来て、学校に行かなければならない。学校教育に関心のない父母は郷政府の体裁を保つために子供を学校に行かせ、3年から5年で学校はやめ、寺院に行かせる。一部の家では初めから寺院に行かせていたり、子供が望んで寺院に行くケースも多い。実際、学校よりも栄悟寺の方が、数段高いレベルの文化・教育を保っており、信頼されているようだ。そのため栄悟寺は部落の教育について非常な重責を担っている。ただし、全ての寺院が栄悟寺のように規模、僧侶の水準とも高いわけではない。



栄悟寺大殿で読経の学習をする小僧達

郷政府の資料によると、唐尕昂郷全体で小学校に通うべき適齢期の子供が現在 376 人いる。民族の内訳はチベット族 304 人、漢族 56 人、回族 16 人。しかし、実際に学校に通っている子供の数は 150 人前後といったところだそう。ここ 95 年から 98 年までの 3 年間に卒業できた者が 59 人、中学校に進学できた者は 56 人であるという。何人が卒業年齢に達しているかは定かでないところがあるものの、単純に現在の就学人数を 6 等分しても年に 60 人の卒業生しか出ない計算になり、この 3 年間での卒業人数がいかに少ないかが分かる。

しかし卒業できた生徒のほとんどが中学に進学できている点からは、経済力のある家庭だけでみると、教育に対する意識が高まっていることが分かる。

唐尕昂郷で、出家した子供を除き、学校教育を受けた生徒のうち、最も高い学歴のある方は、北京に引き抜かれ国家民族出版社でチベット語の翻訳をし、中国画報チベット語版の編集責任者をされている当増扎西さん（35 歳）である。彼には北京で会い、人格が優れ、スマートで、たいへんなエリートであるなどの印象をもった。

彼は、栄悟寺主持の丹木切が小学校 3 年生のとき、他校の漢文の先生であった。合作の中学を出て、小学校の教師となり、スカウトされ、短期大学や甘肅民族学院で勉強されたので、北京語も非常に流暢に話される。丹木切を除けば、環境に恵まれエリートとなった唯一の人物である。

彼が「我々のチベット文化を理解しようとするなら、それはチベット佛教の中に全てがあります。チベット佛教を離れたら、論じるものはありません。長い間に生活文化が近代化の経済・情報改革によって、ほんの少しは外の影響を蒙るのですが、大きく変わるのとは容易なことではありません」と明言したのが非常に印象的であった。

その他、現在、部落内で高い学歴のある者は合作市にある 5 年制中学校を卒業した男女各 1 人の 2 名である。彼らも栄悟寺の助言により中学に行った。

男性は現在 22 歳、郷政府に勤務。女性は唐尕昂郷では学歴に見合う就職先がなく、逆に都市の合作となれば中学 5 年程度の学歴では必要とされない。さらに高いレベルを目指したくても経済力がない状況である。

そのほか唐尕昂郷だけの問題ではなく、チベット族全体の問題であるが、女性が軽視されがちであるため、女の子は学校に行かせてもらえず、出家したくても中々できないのである。

栄悟寺は他の寺と同じく女子禁制であり、女性の出家者は受容られない。もし出家したいのなら別の地区に尼寺を探しに行かねばならない。チベット佛教の中では女性の地位が低く、比丘戒¹⁰²⁾を受ける事はできず、男性よりはるかに難しい環境である。

過去には合わせれば 3000 人以上の活佛がいた拉卜楞寺でさえ、女活佛は 1 人しか出ていない。

4. 生活

a.

前述したように、部落の人々は基本的に自給自足の生活を送っている。複雑な経済形態などなく、1958 年以前は、栄悟寺が部落の村民を神民という形で管理し、土地を与えて家を建てさせ、労働にノルマを与えて生活の一切を管理していた。

現在、こういった寺院にとって有利な管理制度は中国政府によって廃止されている。但し以前のような厳しい管理機能はないものの、実際には寺院が過去に神民であった者の生活を今まで通り面倒を見ている。

1982 年、中国政府は過去に栄悟寺の所有であった土地の一部を返還したが、栄悟寺は返還された土地のうち、耕地として使用できる部分を各家の人数分に振分け、無償で与えるかわりに、農作物を作らせた。土地の分配方法は、一世帯に平均 10 人分の食糧が取れる土地を与えるようしている。10 人を超える世帯にはそれ以上与えるが、出家者（僧侶）が出た家では家族が減って 10 人以下になっても 10 人分の土地を与えている。今では一世帯当たりの家族数は 6 人になっており、かなり多めに分配している事になる。余剰の土地を与える理由は、余分に収穫された作物を寺院に供養できるようにしているからである。しかし過去のような労働や徴収にノルマを与えず、収穫された作物は、村民が自発的に供養するという形で納めさせている。

現地で見たとこ、子供が大きくなり、家庭に余裕ができた神民が、土地を更に使わせてほしいと嘆願していた。主持の判断で使用許可を出していたようだが、特に契約文書がある訳でもなく、また聞いたところ、与えた土地が寺院で必要になった場合には、随時返却され、使用できるようになっているらしい。

b.

毎年寺院が部落の村民から供養を受けるツェンパの粉は、神民の中で貧しい家に 50 kg ずつ分配している。

c.

部落の神民が家屋を新築したり修繕したりする場合、寺院に願い出れば、主持の判断で寺院所有の森林から木材を伐採することができる。

d.

部落の村民が郷政府に何か要望がある場合は、寺院に申し込み、寺院から郷政府或いは郷長に要望を提出するようになっている。栄悟寺は郷政府の上の夏河県政府とも良好な関係を

保ち、場合によっては郷政府を上回る政治的影響力を持っている。

5. 僧の任務

栄悟寺の部落の村民に対する最も大きな任務は、僧侶が気象を観察して予報を行い、電ひょうが降るのを知らせることである。村民の生活にとって最大の脅威は、電が降って建物が壊れたり農作物に被害が出ることである。そのため寺院の僧侶は、電が降りそうな予兆が出ると、“火供¹⁰³⁾”といわれる儀式を行う。火供は、メリケン粉、砂糖、杉の葉、水で狼煙を炊き、法螺貝を吹いて、電を農地のない山の方へ追い出すのである。

文革の時期、寺院が閉鎖されていた時代には、電が降る予兆が出ると、郷政府が村民への配慮を示し、寺院の法螺貝を吹けない代わりに、爆竹を部落民に配って鳴らさせ、電を追い出すことを試みていたが、効果はなかった。

正確な天気予報、電の追い出しは昔から今でも続く村民に対する重要な任務である。

もし、寺院が電を追い出せずに災害になると、部落民は今までの僧侶が修行不足であり、寺院の主持は尊敬に値しないと主持交代の要求提出にまで発展することもあった。

今まで読み聞きしたチベットの活佛とは、あらゆる者から尊敬の念を持って遇せられ、誰もが絶対服従するというような表現のされ方をしていたが、今、かなりの数の活佛が、修行不足で、学問も知らず、部落民から尊敬を得られず、村民の生活をまとめられないという理由で供養を得る事ができず、非常に苦しい生活を迫られているようだ。このような活佛の中には、自然消滅してしまう者もあるらしい。時代の流れもあるのだろうが、現在のチベット族の人々は、必ずしも全員が活佛或いは寺院に敬意を払って服従しているとは言い難い。

どの僧侶も学問の中で最も重要視するのは“算命学”（占い）である。栄悟寺のみならず、一般に僧侶達が修学する算命学は、インド伝来のものに、中国の易学・八卦とチベット古来の土着の占術を加え、特色のあるかなり成熟した学問となっている。

算命学は、その部落民の運命判断、一家安泰の祈禱、高山に潜む神々の鎮魂などに使われる。

次の図は、栄悟部落の人々が高く険しい山を超える際、道中の無事を祈るため、山の神に捧げる札である。これを山越えの道中で経を唱えつつ捲くのである。

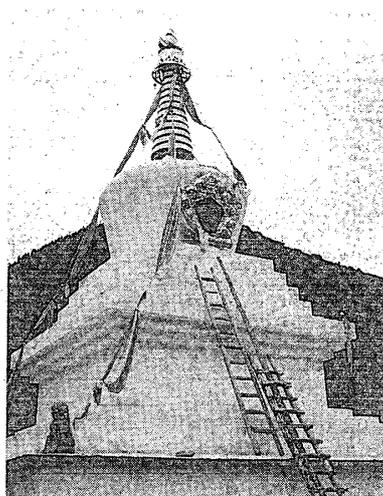
図に描かれている動物は、

中央一馬¹⁰⁴⁾ 四海（世界）の中に馬の形をした火山があったといわれ、〈火¹⁰⁵⁾〉を表す。

左上一大鵬鳥¹⁰⁶⁾ 天空を飛翔する鳥で、〈天¹⁰⁷⁾〉を表す。

右上一龍¹⁰⁸⁾ 大海或いは大湖に棲むといわれる龍で、〈水¹⁰⁹⁾〉を表す。

左下一獅子¹¹⁰⁾ チベット族の聖地、発祥の地といわれるカン・リンポチェに棲むといわれ



栄悟寺の仏塔。塔の頂点は黄金でできており、中には100体の仏像が座している。



る雪獅で、〈土¹¹¹⁾〉を表す。

右下—老虎¹¹²⁾ 森林の中に住む虎、〈木¹¹³⁾〉を表す。

このような占いが様々有り、それらを組み合わせ、各々の僧侶が自らの占術を形成している。栄悟寺では、部落民が山を越える時や仕事で登山する時など、その厳しい大自然の環境から人々を守護して無事を祈るため、占術を用い祈りを捧げる。

6. 信仰（心）

この栄悟寺が建立されて以来、部落民は佛教を信仰するようになった。栄悟寺の主持丹木切が、86歳の長老僧から伝え聞いた（寺院の歴史を記載した文献はない）ところによると、寺院創設から今日までに、異教徒が宣教に来た事が只一度だけあったという。今から80年前の国民党時代、老僧がまだ6歳だった頃、アメリカからキリスト教宣教師が妻子を連れて拉ト楞鎮にやって来た。彼の名を拉ト楞鎮の漢民族達は「吉(ji) 牧師」と呼んでいたが、英語名（例えば Jimmy）から発音の合う漢字を当字（吉米(ji mi)）としたものであろう。

この吉牧師は、拉ト楞寺に近い所に住居と教会を建てて住み始めたが、建築資材は全てアメリカから運搬してきたのであった。彼はチベット族と大差ないチベット語を話し、チベット族と一緒にツァンパを食べ、チベット語の聖書を多数持ってきていた。週に一度は、唐尕昂郷の漢族を案内役に、一軒ずつ家庭訪問し、聖書や食品や子供の玩具などを配って歩いた。また病人を見つけるとアメリカ製の抗生物質を与え、注射を打って治療もした。

当時、栄悟部落の人々はアメリカという国を知る筈もなく、西洋の薬も、注射を打つ治療も知る筈もなく、初めて見るこのアメリカ人を奇妙に思っていたが、彼が施す治療・薬品は非常に効き目があり、吉牧師の行動は善意であることが分かり、誰も彼を嫌う者はなかった。

吉牧師の目的は布教活動で、イエス=キリストを信じれば誰もが天国に行けると説き、キリスト教の教義・礼拝を教えて歩いた。

ある時、牧師が部落民を誘い礼拝を教えていると、部落民は彼の手足を押え付け、「もし飛ぶことができたなら貴方の教えを信じよう」といった。牧師はそうまでされても諦めることなく、暫らくするとまた栄悟部落に戻って来て、案内役の漢族の家で病人の治療をし、贈り物を配り、聖書を説き続け、約30年間も布教活動を続けた。しかし、何の成果も得ることはできなかった。聞くところによると、案内役の漢族は牧師の友人であったが、牧師の前では信心深くしているものの、牧師が帰ってしまえばやはり佛教を信仰していようだ。牧師は中華人民共和国が成立した1949年に本国に帰った。

このアメリカ人牧師以外、この部落に佛教以外の宗教を布教活動に来た者はなかった。同地に住んでいる回族でさえイスラム教を広めるところか、イスラム教寺院のモスクを建てることもできず、部落内では信仰活動ができないほど、部落民の佛教への信仰心は厚く、誰に

も変えることはできなかったのである。

八、結論

ご存知のように、世界の佛教の流れは、経典の言語により三大系統（①パーリ語②漢語③チベット語）に分けられる。チベット佛教の主要分布地域は、中国チベット自治区、青海省、甘肅省、四川省、雲南省、内モンゴル自治区のチベット族、蒙古（モンゴル）族、裕固（ユグ）族、土（トゥー）族、納西（ナシ）族等他民族に及び、国家ではインド北部、ブータン、ネパール、ロシアのブリア地区等に波及している。

チベット佛教は世界の宗教の中でも独特な文化を持っている。この10数年、チベット文化は世界中の流行となって人々が押し寄せており、アカデミーの世界でも、多数の学者と研究者が多くのエネルギーを費やし研究しつづけてきた。特にチベット文化は、中国やアジアだけではなく、全世界の文明に対して問われる問題となっている。学術研究としても、経典整理、或いはある時期のある教派に対する分析・調査など様々な分野がある。

しかし、冒頭にも述べたように総体的に見て研究の方向性は、ラサを中心としたものである。しかし、所謂チベット族全体を指す文化とはと考えた時、それは不完全なものではないだろうかという思いが募った。私は、特にチベット及びチベット佛教について、専門研究家ではないため、勉強不足の点多々あったと思うが、今回、諸先輩、先生方が余り資料を残していず、外部の人間がほとんど入ったことのない、この甘肅省甘南藏族自治州唐尕昂郷、栄悟部落、栄悟寺を研究対象として選んだのは、少しでもこれまで考えられたチベットという先入観なしに考察できるようにとのもくろみからであった。現地の空気や人々と触れ合い、自分の肌で感じたことを勉めて伝えることが、チベット文化に対する正しい理解への一助になればと希望する。

栄悟寺と部落の人々、そしてその文化の中心となっている拉卜楞寺を調査研究してみた限りでは、甘南州のチベット族にとって、チベット佛教が彼らの政治・経済・文化・教育・生活から習俗まで、全ての面で絶大なる影響をもっている。それは学校であり、生活の面倒を見てくれる小さな政府なのである。教育を例に取るなら、寺院は学校であり、僧侶は教師、経典は教科書である。この世に生を受けた時から死する時まで、彼らと寺院は切り離すことのできない関係なのである。

この地区にも中国の近代化の波が少しずつ押し寄せ、マスメディアや交通等の発達により、恐らく変化が現れてくることであろう。しかし、現地の人々が言った「チベット族はチベット佛教と離れることができないのだよ」という言葉が、結論のような気がする。

後記

この未熟な私が、この研究に携わるには様々な困難があった。現地は日本で言えば富士山のような標高の高い場所であり、高山病に苦しめられた。また、言葉の壁があり、中国といっても中国語に精通しているチベット族はほとんどおらず、やっと通じる人がいたとしても、

チベット族ではないため、考えのニュアンスが違い、本当の触れ合いは難しかった。また、資料に目を通して、チベット族側のものと中国側のものでは、たしかに両方とも資料ではあるが、一部は凄まじく対立した内容となっているため、どちらが正しいかは判断しがたいこともあった。

今回、有り難かったことは、本年5月に北京で行われた、北京大学創立100周年に参加した時、栄悟寺の主持である丹木切加措氏が北京にある高級佛教学院に修学されており、ある人を通じて紹介されたことだった。北京にあるこの佛教学院は、国务院国家宗教局の管轄下にあり、学長は第15世パンチェンラマで、今は亡き第14世パンチェンラマによって創立された中国の佛教学院の最高学府である。毎年、中国全土からチベット佛教の活佛20名が選抜され、修学している。

丹木切加措氏は、この学院ではチベット語・漢語の両学科で首席を獲られ、中国語で適切な表現が出来るだけでなく、物事に対する見方が斬新で、鋭く、客観的な考え方が出来る方であった。チベット佛教界に、このようなスマートで、グローバルな活佛がいるからには、洋洋たる前途が期待できるであろう。

今回の調査に同行して頂き、様々な方々に紹介して頂いただけでなく、私の読めないチベット語の文献も翻訳して頂いた。彼の協力が得られなかったら、この報告をまとめることはできなかったであろう。

その彼が切実に訴えられたのが、チベット族以外の人々にもっとチベット文化を理解してほしいということだった。諸外国の人は言うまでもなく、同じ中国籍の民族でさえ今までの研究や彼らチベット族に対する理解は、必ずしも正しくない部分があり、まるで飼っている象の鼻を触るように勝手に解釈し、それが定説になっていると悲しんでいた。

私が彼らから見せて頂いた様々な事実、教えて頂いた事柄はほんの一部分だけであり、チベット族の奥深い文化を他民族に売るのですかと誤解されたこともあった。それにも拘わらず、協力を惜しまず、正しい文化交流のために尽力して下さったことに心から感謝の意を述べたい。

またこの場を借りて、この調査研究に協力して下さった栄悟寺主持丹木切加措をはじめ、栄悟部落の皆さん、拉卜楞寺活佛扎阿班志達俄堅成多吉、三木丹大喇嘛¹¹⁴⁾、拉卜楞寺哲学院準博士阿旺扎西¹¹⁵⁾、台北佛樺静舍釋願海法師、法尊法師孫弟子の釋宗海師父、北京大学趙恩普教授、唐尕昂郷政府の才讓扎西、チベット語を教えて原文の翻訳をして下さった民族出版社の当増扎西氏、三木雪碧、才讓多吉¹¹⁶⁾、扎西拉姆¹¹⁷⁾、頓珠群培¹¹⁸⁾、格桑頓珠¹¹⁹⁾、拉瓦次仁¹²⁰⁾の皆さんに感謝の意を表し、この拙文を捧げることとしたい。

〈注〉

- 1) དམ་ཚུགས་ཐུ་མཚོ།
- 2) 『中国藏傳佛教史』 冉榮光著《中国文化史叢書 50》文津出版社 1996年9月出版
- 3) བོད་ལྗོངས།
- 4) བོད་རང་རྒྱུ་ལྗོངས།
- 5) 松贊干布 (ལྷན་བཙན་སྐམ་པོ།) チベット 33 代の贊普 (國王 / 在位 629~650 年)。
- 6) བོད།
- 7) ཐུ་མཚོ།
- 8) 法尊法師。漢族の僧としては、初めて西藏を訪れチベット佛教を研究した。

- 9) དབྱུག་པ།
- 10) གཅོད་པ།
- 11) རམས་པ།
- 12) རམས་པ།
- 13) ཨ་མདོ།
- 14) ཉི་མ།
- 15) ཉ་ལའི་ལྷ་མ།
- 16) གངས་རིན་པོ་ཆེ།
- 17) མ་ལམ་གཞུང་མཚེ།
- 18) ཨར་ལྷན་གཞུང་པོ།
- 19) ལྷན་པ།
- 20) པཎ་ཆེན་ལྷ་མ།
- 21) སེ་ཁྲིན་དཀར་མཛེས།
- 22) ཨ་ཆེན་ལོ་རྒྱུ།
- 23) མདོ་ལ་རྒྱུ་མོ།
- 24) ལྷན་ལྷན་ཆེན།
- 25) ལྷན་པ།
- 26) ལྷན་ཆེན་པོ།
- 27) དབྱུག་གཅོད་པ།
- 28) ལྷན་བཞུག་ནང་བཟུན།
- 29) རྩ་ལ་པཎ་རི་ཉ་ཨ་ཆུན་འཕྱིན་ལས་ཚོ།
- 30) 大乘佛教（梵語 mahDyDna の訳。「大」は廣大無限でもっともすぐれた意、「乘」は悟りの彼岸へ到達させる乗物の意）佛語。後期佛教の二大流派の一つ。小乗佛教が修行による個人の解脱を説いたのに対して、利他救済の立場から広く人間全体の平等と成佛を説き、それが佛の教えの真の大道であるとする教え。中国・日本に伝わった佛教の宗派は、ほとんどこれに属する。
- 31) བོན་ཆེན་པོ།) チベット佛教以前の土着信仰。日本の神道のようなもので、佛教伝来以前、チベットに広まった民族宗教。
- 32) ティソン・デツェン（赤松徳賛）在位 755~797 年。
- 33) ལྷན་པོ་ལྷན་པོ་ལྷན་པོ་ལྷན་པོ།
- 34) ལྷན་པོ་ལྷན་པོ།
- 35) 赤熱巴堅（ཁྲི་རལ་བ་ཅན།）本名チツデツェン。12歳で王位に即位し、第41代贊普となった。
- 36) ལྷན་པོ་ལྷན་པོ།
- 37) ལྷན་པོ་ལྷན་པོ།
- 38) ལྷན་པོ་ལྷན་པོ།
- 39) དབྱུག་པོ་ལྷན་པོ་ལྷན་པོ།
- 40) ལྷན་པོ་ལྷན་པོ་ལྷན་པོ་ལྷན་པོ།
- 41) ལྷན་པོ་ལྷན་པོ་ལྷན་པོ།
- 42) ལྷན་པོ་ལྷན་པོ།
- 43) དབྱུག་པོ་ལྷན་པོ།
- 44) ལྷན་པོ་ལྷན་པོ།
- 45) ལྷན་པོ་ལྷན་པོ།
- 46) ལྷན་པོ་ལྷན་པོ་ལྷན་པོ།
- 47) ལྷན་པོ་ལྷན་པོ་ལྷན་པོ།
- 48) ལྷན་པོ་ལྷན་པོ་ལྷན་པོ།
- 49) ལྷན་པོ་ལྷན་པོ།
- 50) ལྷན་པོ་ལྷན་པོ་ལྷན་པོ།
- 51) ལྷན་པོ་ལྷན་པོ།
- 52) ལྷན་པོ་ལྷན་པོ།
- 53) ལྷན་པོ་ལྷན་པོ།
- 54) ལྷན་པོ་ལྷན་པོ།
- 55) ལྷན་པོ་ལྷན་པོ།
- 56) ལྷན་པོ་ལྷན་པོ།
- 57) ལྷན་པོ་ལྷན་པོ།

- 58) བད་དཀར།
- 59) རྩ་དར་དཀོན་པ།
- 60) དགེ་སྐྱོད་སྤྱོད་བཟང་བསམ་འགྲུབ།
- 61) ヤク ウシ科の哺乳類。体高約 1.6メートル。ウシに似ているが体の下面に長毛がたれる。雌雄とも上方に湾曲した角をもつ。野生種の毛色は黒褐色で、家畜化したものには黒白斑・白色などもある。チベット高原やヒマラヤ地方の原産で、野生種は標高 4500~6500メートルの高山の草原にすむ。原産地では役用・食用・乳用とし、毛は衣服に利用。犛牛（りぎゅう）。ぼうぎゅう。
- 62) ལྷན་ལྷན་སྤྱོད།
- 63) བགྲ་ཤིས་སྤྱོད།
- 64) 油条 練って発酵させ塩味を加えた小麦粉を長さ 30センチ程度のひも状または縄状のものにして油で揚げたふわふわとした食品。おかゆを食べる場合、添え物としても用いられる。
- 65) གུན་མཚོན་སྤྱོད་ཕྱི་དང་ཕྱི་དག་དབང་བཙུན་འགྲུབ།
- 66) ལྷ་བྱང་བགྲ་ཤིས་འཁྲིལ།
- 67) དགའ་སྤྱོད་བཟང་སྤྱོད་ཕྱི་དང་ཕྱི་དག་གཞུགས་སྤྱོད་འཁྲིལ་བའི་སྤྱོད།
- 68) マニ車 寺院の外壁に取り付けた祈禱輪。70~80位の筒状の中に経文がロール状に入っており、一度廻せば経典を一回読むことになる。
- 69) བགྲ་ཤིས་འཁྲིལ།
- 70) 嘉木様 (འཇམ་དབྱངས་བཞུགས་པ།) その意味はチベット語で“文殊菩薩”を指す。現在のラト楞寺主持嘉木様第6世洛桑久美活佛は、全国政治協商会議常務委員、全国佛教協会副会長、甘肅省政治協商會議副主席、甘肅省佛教協会会長、甘南藏族自治州政治協商會議副主席、ラト楞寺院管理委員会名誉主任の肩書きをもつ。
- 71) 拉章 (ལྷ་བྱང་།) ラマ（僧）の所在地をいう。元代、バスバ国師から始まった。1265年バスバが奉命により薩迦（サキャ）に戻り、チベット地区の地方行政機構の整理をするため拉章組織を作る。以後、ラマ僧のうち活佛は、これを真似て、自らの“拉章”を建立するようになった。
- 72) 顕教 佛語。顕（あら）わにわかりやすく説き示した教え。密教以外の一般佛教をさす。
- 73) ཐོས་བསམ་སྤྱོད།
- 74) ལྷན་སྤྱོད་པ་གྲ་ཚང།
- 75) ལྷན་སྤྱོད་པ་གྲ་ཚང།
- 76) ལྷན་པ་གྲ་ཚང།
- 77) དུས་འཁོར་གྲ་ཚང།
- 78) ལྷ་རྩེ་གྲ་ཚང།
- 79) གཙུག་ལྷན།
- 80) རྩ་དར་ཚོ་པ།
- 81) 土司 (དཔོན་པོ།) 土官ともいう。主として中国西南地域の少数民族を領掌した世襲の地方官で、少数民族の酋長がこれに任じられた。現在の湖南・四川・雲南・貴州・広西などの各省には、古来より少数民族が住み、漢代以来、官吏を置いて治めた。
- 82) 神民 (ལྷ་ལྷོ།) 部落の信者から選ばれ寺院を守り奉仕する人々。一種の奴隷制。
- 83) དཔོན་ཚང་ཡིད་དམ།
- 84) བསེ་ཚང་སྤྱོད་ཕྱི་དང་གསུམ་པ།
- 85) གཉེན་ལྷན་དཀོན།
- 86) ལམ་རིམ་པ་སྤྱོད་བཟང་ཚུལ་འཛིན་སྤྱོད་གཉེན་པ།
- 87) ダライラマ 6世倉央嘉措大師 (1638~1706年)
(ལྷུང་དབང་སྤྱོད་ཕྱི་དང་ལྷུང་པ་ཚངས་དབྱངས་ལྷུང་མཚོ།)
- 88) 堪布 教務を預かる高僧のこと。経典に深く通じ、戒律を厳守する僧でなければならない。
- 89) タール寺 (塔爾寺) 明代嘉靖 39年 (1560) 創建。ゲルグ派六大寺院の1つ。チベット語では「十万佛」を意味する“クンプム”という。青海省湟中県にある。
- 90) 嘉木様二世貢去乎晋美旺波大師 (1728~1791年; 清雍正 6年~乾隆 56年)
- 91) 法台 (ཁྲི་བ།) 法会を営む台のことで、チベット佛教では口伝の説法で教えを学ぶため、法台に就く者の役割は非常に重要となってくる。寺院、各学院の主任を指す。
- 92) 四合院 中庭を囲むように作られた四角形の住宅。北京の伝統的住宅の建て方である。
- 93) མཚོན་འགྲུབ།
- 94) 酥油花 (མར་རྒྱན་མེ་རྟོག།) 牛・羊の乳を煮詰めて取った油。バターのようなもので作った彫刻。
- 95) 參籠の行 1年に最低1回は行われる修行で1週間から数ヶ月間にも及ぶ。ある課題を決め自室に閉じ込めて学習する。この間、外部に分かるよう自室の門に印を付け、外部の者と会話してはならない。食事は朝5

時前、夕食は午後8時以降の2回だけと一切俗世に触れないようにされ、僧侶が個人の宿舎を持つのもこのためである。

- 96) མ་ཁི་རིལ་བུ།
 97) 夏安居（げあんご）外出を禁じ寺院の決められた場所で修学すること。チベットではこの時期昆虫が多く発生し、出家者が容易に虫を踏み殺さないようにと始まった。
 98) 八関齋戒（བཞེན་གནས་ཡན་ལག་བཟུང།）大成徳金剛を修学するため、体を清め、経を唱えてもらい、精進料理を食する戒を行う。
 99) བར་བ།
 100) བྱ་གཡེང།
 101) མེ་དུར།
 102) 比丘戒（དགེ་སྤོང།）（びくかい；梵語 bhikṣu パーリ語 bhikkhu の音訳。苾芻（びっしゅ・びしゅ・びっすう）とも音訳する）佛語。出家して受持する具足戒。「具足」は近づくの意で、涅槃に近づくことをいう。四分律では、比丘は二五〇戒、比丘尼は三四八戒を数える。具戒。大戒。
 103) བསང་མཚན།
 104) ཏྟ
 105) མ།
 106) ལྷང།
 107) གནམ་མཁའ།
 108) འབྲུག།
 109) ཚ།
 110) སེང།
 111) ས།
 112) ལྷག།
 113) སྤོང།
 114) བསམ་གཏན།
 115) དག་དབང་བཟུངས།
 116) ཚེ་རིང་རྩེ།
 117) བཟུངས་ལྷ་མོ།
 118) དྲན་གྲུབ་ཚེས་འཕེལ།
 119) སྐལ་བཟང་དྲན་གྲུབ།
 120) ལྷ་བ་ཚེ་རིང།

〈参考文献〉

1. 《史記》／司馬遷撰 漢
2. 《漢書》／班固撰 後漢
3. 《後漢書》／范曄撰 南朝・宋
4. 《三国志》／陳寿撰 西晋
5. 《隋書》／魏征撰 唐
6. 《旧唐書》／劉昫撰 後晋
7. 《新唐書》／歐陽修・宋祁撰 明
8. 《元史》／宋濂撰 明
9. 《明史》／張廷玉撰 清
10. 《資治通鑑》／司馬光撰 北宋
11. 《通典》／杜佑撰 唐
12. 《秦辺紀略》／梁份撰 清 青海人民出版社 1987
13. 《通鑑吐蕃史料》／蘇晋仁編 西藏人民出版社 1982

14. 《藏族社会历史调查 (①~⑥)》 / 西藏社会历史调查资料丛刊編集室編 西藏人民出版社 1987
15. 《安多藏族史略》 / 黎宗華・李延愷著 青海民族出版社 1992
16. 《甘南藏族部落概述》 / 甘南州政治協商會議編 1994
17. 《敦煌吐蕃佛教的特点》 / 「藏族史論文集」 四川民族出版社 1988
18. 《甘青藏傳佛教寺院》 / 浦文成編 青海省人民出版社 1990
19. 《民族文化史研究》 / 龔蔭著 成都電訊工程学院出版社 1987
20. 《衛藏通志》 / 商務院書館万有文庫
21. 《民族団結》 1987. 11 月期
22. 《中国藏傳佛教史》 / 冉光榮著 文津出版社 1996
23. 《拉卜楞寺概況》 / 羅癸西・李耕・曲又新・苗滋庶 共著 甘肅民族出版社 1987
24. 《談談藏族文化》 / 謝佐著 「青海社会科学」 1988. 5 期
25. 《近代藏族地区的寺廟經濟》 / 況浩林著 「中国社会科学」 1990. 3 期
26. 《甘青藏傳佛教寺院》 / 甘肅省委员会統戰部編 「甘肅宗教」 甘肅人民出版社 1989
27. 《試論嘉木樣活佛系統的形成》 / 丹曲著 「西藏研究」 1987. 3 期
28. 《西藏佛教在雲南的傳播和影響》 / 楊学政著 「西藏研究」 1988. 1 期
29. 《納西族喇嘛教述略》 / 龔蔭著 「民族文化史研究」 研究成都電訊工程学院出版社 1987
30. 《喇嘛教石蒙古族中的傳播》 / 楊紹猷著 「民族研究」 1981. 5 期
31. 《甘孜藏族自治州概況》 / 四川民族出版社
32. 《西藏佛教發展史略》 / 王森著 中国社会科学院出版社 1987
33. 《阿壩藏族羌族自治州藏傳佛教史略》 / 四川出版社 1990
34. 《西藏自治区概況》 / 西藏人民出版社 1984
35. 《西藏原始宗教一本教簡述》 / 段克興著 「西藏研究」 1983. 1 期
36. 《論西藏政教合一制度》 / 東嘎・洛桑赤列著 郭冠忠・王玉平訳 北京民族出版社 1985
37. 《藏族本教的起源与發展問題討論》 / 格勒・祝啓源著 「世界宗教研究」 1986. 2 期
38. 《活佛的世界》 / 王雲峰著 民族出版社 1997
39. 《西藏的人口与社会》 / 馬戎著 同心出版社 1996
40. 《拉卜楞寺志》 / 阿莽班智達 (清朝) 著 瑪欽諾悟更志・道周訳 甘肅人民出版社 1997
41. 《甘肅藏族人口》 / 甘肅省人口普查办公室編 中国統計出版社 1994
42. 《拉卜楞寺佛教文化》 / 索代著 香港軒轅出版社 1998
43. 《西藏志》 / 培爾著 董之学、傳勒家訳 上海商務印館 1936
44. 《蒙藏新志 上・下》 / 黄奮生編 広州中華書局 1938
45. 《康藏概況報告》 / 格桑澤仁著 自費出版 1932
46. 《甘青川康兩省辺地西藏之今後》 / 「辺疆通訊」 景元・文漢著 1946
47. 《拉卜楞在西北地位的重要性》 / 李式金著 東方雜誌 1946
48. 《西藏志》 4 卷 / 徐天球撰 「黄州府志」 清朝

49. 《拉卜楞視察黃記》／張文郁著 「西北雜誌」創刊号 1912
50. 《藏族部落制度研究》／陳慶德著 中国藏学出版社 1995
51. 《中国民族統計年鑑》(1949~1994)／国家民委經濟司、国家統計局国民經濟綜合統計司編 民族出版社 1994
52. 《中国統計年鑑》(1993~1995)／北京統計出版社
53. 《世界十大宗教》／黄心川主編 北京東方出版 1988
54. 《西藏的宗教和中国共产党的宗教政策》／江平等著 北京藏学出版社 1996
55. 《藏族宗庭与宗教的關係》／「亞洲地平線第2卷」李安它著 1949
56. 《西藏的婦女地位》／「国外藏学研究訊文集第3輯」西藏人民出版 1987
57. 《試論西藏的寺院的教育》／「藏学研究論叢第2輯」張虎生著 1990
58. 《黃教寺院教育》／朱解琳著 北京中央民族学院出版社 1989
59. 《甘肅藏族部落的社会与歷史研究》／洲塔著 甘肅民族出版社 1996
60. 《中国藏族部落》／青海省社会科学院藏学研究所編 陳慶英主編 1990
61. 《早期伝教士進藏活動史》／伍昆明著 中国藏学出版社 1992
62. 《Tibet, the Mysterious》 Thomas H. Holdish London, 1907
63. 《A History, Folklore & Culture of Tibet.》 A. H. Francke New Delhi ; First Published, 1905 ; First Indian Reprint, 1979
64. 《The People of Tibet》 Bell, Charles Oxford ; Clarendon Press, 1928
65. 《Communist China and Tibet》 Ginsburgs G. and M. Mathos 'The First Dozen Years' Martinus Nijhoff ; The Hague, 1964
66. 《A History of Modern Tibet 1913-1951》 Goldstain, Mevyn C. Berkeley ; University of California Press, 1989
67. ཀུན་མཁྱེན་འཇིགས་མེད་དབང་པོས་མཛད་པའི་《རྒྱ་བོད་རྟོག་གསུམ་གྱི་ལོ་རྒྱུས་མདོར་བཅུས།》
68. སློབ་དཔོན་དཔྱད་གཞི་བསམ་གཏན་གྱིས་བཅམས་པའི་《བོད་གྱི་ལོ་རྒྱུས་ཀྱི་དགའི་མེ་ལོང་བཞུགས་སོ།》
69. སློབ་དཔོན་དཔྱད་གཞི་བསམ་གཏན་གྱིས་བཅམས་པའི་《ལྷན་སེལ་སྦྱོན་ལེ།》
70. བཅེ་སློབ་བཟང་དཔལ་ལྷན་གྱི་མཛད་པའི་《རྗེ་བཙུན་འཇམ་དཔལ་དབྱངས་གྱི་སྐུ་བརྟན་མཐོང་གྲོལ་ཆེན་མོའི་དཀར་ཆག་སྐལ་བཟང་ན་བའི་བདུད་རྩི།》
71. གྱི་ལྷང་བཟུ་ཤེས་རྒྱ་མཚོ་དང་གྱི་ལྷང་བཟུགས་མཚོག་རྗེ་རྗེས་བཅམས་པའི་《བོད་མི་བྱུག་དོན་རྒྱུག་གི་རུས་མཛོད་མེ་ཉི་ག་སྦྱང་ཚལ།》
72. སུ་རུའི་མིང་ཅན་གྱིས་བཅམས་པའི་《ལྷག་ཚང་ལྷ་མོ་ཀའི་དགོན་གྱི་ལོ་རྒྱུས་མདོར་ཅམ་བཅོད་པ་འོ་མཚར་ལྷ་ཡེ་འོ་ལོ་མོ།》
73. སློབ་བཟང་རྒྱ་མཚོས་བཅམས་པའི་《ཁ་གྲུའི་སྐར་རྩིང་དགོན་དང་ཁ་གྲུའི་སྦྱིའི་ལོ་རྒྱུས།》
74. ཅམ་མཁའ་ལོ་རྒྱུས་བཅམས་པའི་《ཞང་བོད་གནའ་རབས་གྱི་ལོ་རྒྱུས་ལོ་རྒྱུས་མེ་ལོང་།》
75. ཀུན་མཁྱེན་འཇིགས་མེད་དབང་པོས་མཛད་པའི་《ཅོ་ཞེ་བསྟན་འགྲུང་དཀར་ཆག།》
76. དབལ་མང་བརྟེན་ཏུ་མཛད་པའི་《སློབ་བཟང་བཟུ་ཤེས་འབྲིལ་གྱི་གདན་རབས་ལྷའི་རྩ་ཆེན། 》
77. བེས་པ་འཇམ་དབྱངས་གྲགས་པ་སོགས་གྱིས་བཅམས་པའི་《བེས་མདོ་དགོན་ཆེན་གྱི་གདན་རབས།》
78. གྱི་རུ་བཟུ་ཤེས་གྱིས་བཅམས་པའི་《གྱི་བཟུའི་ཚོས་འབྱུང་།》
79. མཁའ་དབང་དུང་དཀར་སློབ་བཟང་འཕྲིན་ལས་གྱིས་མཛད་པའི་《བོད་གྱི་ཚོས་སྤྱོད་བྱུང་འབྲེལ་སྐོར་བཤད་པ།》
80. བོད་རྒྱུང་ས་ཆབ་གྲོས་རིག་གནས་དབྱུང་གཞིའི་རྒྱ་ཆ་ལྷ་ཡོན་ལྷན་ཁང་གིས་ཚོམ་གྲིག་བྱས་པའི་《བོད་གྱི་ལོ་རྒྱུས་

- རིག་གནས་དབྱུང་གཞིའི་རྒྱ་ཆ་བདམས་བསྐྱེགས།》
81. ལྡུ་ཚོ་སྲས་ཀྱིས་བཅམས་པའི་《ལྡུ་ཚོས་འབྱུང་》
 82. ཁྱི་ཀྱ་བསྟན་འཛིན་གྱིས་བཅམས་པའི་《དབའ་རིས་ཀྱི་རིས་མཛོད་》
 83. རྒྱ་རིན་ཆེན་ལྡེས་བཅམས་པའི་《ཡར་ལུང་ཚོས་འབྱུང་།》
 84. དགེ་འདུན་ཚོས་འཕེལ་གྱིས་བཅམས་པའི་《དེབ་ཐེར་དཀར་པོ་》
 85. 《ལུག་ལྷགས་ཚིས་ཀྱི་བསྟན་བཅོས་ལེགས་པར་བཤད་པ་རིགས་ལྡན་མཚོད་པའི་འོད་ལྗང་།》